

オーバーロード 災厄の槍使い

三元新

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ユグドラシルのサービス終了日

とあるゲームが好きだったは翼は、モモンガの誘いで来たナザリツクにてギルド拠点ごと異世界に転移してしまう、その時、たまたまいた、翼のリア友であり幼馴染みでもあるギルドメンバーのペロロンチーノ、ぶくぶく茶釜、そして我らがギルド『アインズ・ウール・ゴウン』のギルド長 モモンガ達と共に転移後の世界を歩み始める。

目次

1 2 話	1 1 話	1 0 話	9 話	8 話	7 話	6 話	5 話	4 話	3 話	2 話	第 1 話
93	89	76	70	66	53	44	37	31	15	8	1

第1話

ユグドラシル最終日。

とある一室で目覚める少女が1人。彼女はおもむろにメッセージ画面を開き、すぐに閉じた。

「……もうすぐ。あの人に会える」

そんな彼女——現実世界では彼——はベットから起き上がるとすぐに、目的地へと向かった。

彼女（彼）が所属するギルドの名は『アインズ・ウール・ゴウン』。最盛期には数多あるギルドの第9位にその名を刻み、1500人からなる襲撃者の一団を退け、公式チートアイテムである世界級（ワールドアイテム）を二桁所持している最凶ギルド。

彼（彼女）はとある理由でユグドラシルにログインがなかなか出来なく、ごく希にしかログインできていなかった。

そんな彼がパソコンを開いたときにたまたま見たメッセージ。それは、彼女（彼）の所属するそのギルド長から、『最後の時はナザリックで過ごしませんか?』と言うものだった。

ナザリック地下大墳墓・円卓の間

そこには4つの影があった。その影は人間の姿ではない、その内1つは骸骨、もう1つは4枚翼の鳥人、後の2つはスライムだった。

「ペロンチーノさん、ぶくぶく茶釜さん、へろへろさん、本当にお久しぶりです、ユグドラシルのサービス終了日とはいえ、正直本当に来てもらえるなんて思ってもいませんでしたよ」

「いやー、本当におひさしぶりですねー、モモンガさん」

「モモンガさんおひさー」

「お久しぶりですモモンガさん」

各々が挨拶をし、雑談が始まった、転職した先がブラックだったとか、最近発売した中ではこのエロゲが至高だとか、声優で売れっ子に

なり次々仕事が入ってきて大変だとか、そんな楽しい語らいも終わりを告げる。

「すみません。明日も早くこれ以上いるとヤバイんで、ログアウトさせてもらいます。本当にすみません。それと、いままでありがとうございました。それではまた、現実世界で」

残っていた4人の内、ヘロヘロがそう言い残してログアウトした。

「ヘロヘロさん、大丈夫ですかね」

円卓の間にいたギルド長、モモンガが心配そうに呟く、本人が言うにはもう体がボロボロで精神的に辛かったそうだ。頑張つて残ったものの、結局は耐えられず帰ってしまった。そんな彼に自分の我儘で直接『せつかくですから最後まで残っていかれませんか』とは言えなかった。

そんなモモンガの姿を見てペロロンチーノは言う。

「俺と姉ちゃんて良かったら最後まで残るよ。……それに、俺と姉ちゃんの”幼馴染み”も来るしね」

「幼馴染み?……まさか!?!」

ペロロンチーノがそう告げ、モモンガが驚愕した直後、円卓の間の外から走る足音が聞こえ、勢いよく円卓の間の扉が開かれた。

「すみません! 遅れました!」

部屋に居た3人が開いた扉に目を向けると、そこにはまるで武士の格好をした小柄だが、黒髪の凛とした少女が立っていた。

「遅くなって申し訳ありません。モモンガさんから送られてきたメールに気づいてなくて、ぶくぶく茶釜さんに教えてもらっていなければ知らないまま今日一日を過ごすところでしたよ」

そんな八雲翼——改め”イズナ”に、モモンガと呼ばれた骸骨は首を振る。

「いえいえ、まさか翼さん——いや、今の姿はイズナさんでしたね。あなたにもう一度あえるとは思っても見ませんでしたよ。」

「ありがとうございます。モモンガさん。それにペロロンチーノに、ぶくぶく茶釜さんもお久しぶりです。ペロロンチーノは半年ぶりで、ぶくぶく茶釜さんとは3ヶ月ぶり——ああ、電話なら昨日ぶりだし

たっけ」

「うん。イズナおひさ！ 確かにこうして会うのは半年ぶりだね」
「翼ちゃんおっひさー！ そうだよ、こうしてゲームだけれど直接会うのは某少女向けアニメでの声優のお仕事以来だね。話すだけなら昨日ぶりかな？」

武士の少女―イズナが挨拶をすると部屋に居た3人も挨拶を返した、彼のキャラネームは八雲・N・イズナ、ユグドラシル内で自分の大好きなゲームキャラを、再現して理想のキャラを作ると言う目的で始めたが、装備の作成や冒険に人一倍のめり込んでいた。

イズナは礼をして円卓の間に入り適当な席に座り、辺りを見回して確認をとるためモモンガにとう。

「モモンガさん、最後まで残るのはここにいますか？」

「残念ながら、先ほどまでへ口へ口さんが居たのですが体調不良で口グアウトしました」

「……そうでしたか。とても残念です、最後に全員に挨拶したかったのですがね。この様子だと全員はやはり揃いませんでしたか」

「仕方ないですよ、皆それぞれ事情があるんですから、――あ！そろそろ時間なので玉座の間に行きませんか？」

「いいですね。いきましようよ！ みんなで！」

「確かにそうだね！ いこいこ！ ほら翼ちゃんも！」

「わかっていますから、そんなに引つ張らないでくださいよ」

そのモモンガの言葉に各々無言で了解し、円卓の間を出ることにした、部屋を出るさいモモンガはギルドの象徴たるスタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンをその手に取り円卓の間を出た。

玉座の間に向かう中、モモンガの案で途中にいたNPCセバス・チャンと戦闘メイドプレアデスの計7人をつれていくことになった。

玉座の間に着き、モモンガはNPC達に待機を命じて玉座につく。モモンガは玉座の横に控えるNPCアルベドの設定が気になりコンソールを開き、スクロールしていく。それを見ていた他の3人はコン

ソール内の文字を読める位置に移動しそれを眺めた。

「「「なっが!!」」」

思わず4人でそう叫んでしまうほど、長かった。

「設定魔だからね、しようがないですよ」

それを見たイズナが嘆息しながらそう言った。

「それにしたってこれは……ん?」

「どうしました?……『イズナ(ナドレ)とは親友(保護者)である』
『ちなみにビッチである』。って、なるほどなるほど。前半はともかく、後半の最後の一言は清楚系のビジュアルとのギャップってことですかね?まったくあの人らしいですよ」

「まあ、あの人ギャップ萌えだからなあ……」

諦観の念が若干混じったような声音でつぶやく二人。

「それにしても、ビッチはあんまりじゃないか?」

モモンガがつぶやくと、その言葉にイズナがひらめいたと言うように提案する。

「そうだ、折角管理者権限のある杖があるんだし、そこいじっちゃいましょうよ」

そう、ギルド武器にはいろんな機能があり、その中にはNPCの設定を自由に変更することの出来る権限もあった。

「ええ……でも……うーん、確かに流星のこれは、とは思いますが……」

「ならちやちやつと変えちゃいましょうよ!」

そうイズナに押され、スタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンを振る。

するとウィンドウが赤く発光し、Administrator(管理)の文字が浮かぶ。

ちなみにビッチである。の一文を消去し、あごを撫で思案する。

「さて、なんて入れましょうか」

「うう……なにいれましょう?」

「ふむ……。——よし、なら『モモンガを愛している』にしようかな」

モモンガがそう言った瞬間、八雲椿はモモンガを見ていた。

「……………モモンガさん…あなたって……………」

「モモンガさん、気持ちは分からなくもないですが……………」

「モモンガちゃんもやっぱり男だね〜」

「あ、いや!?これには深い訳はありませんよ!?ただちよつとした出来心でして——」

モモンガはイズナとペロロンチーノとぶくぶく茶釜の言葉と視線で我に返り慌てて弁解をしていたが、あたふたとして顔文字もあたふたとしているモモンガを見てイズナが笑っていた。

「クスクス……………すみません、冗談ですよ。最後までいいんじゃないですか? あなたはギルド長です。少しの茶目っ気くらい許してもらえるでしょうしね。そう思いませんか?ペロロンチーノさん」

「そうだね。たとえモモンガさんが自分の抑えきれない欲望のままに設定をいじつちやっただとしても構わないよ!それに、あの人寝取り属性も持ってたから大丈夫!むしろ嬉々として喜んでいるだろうよ!」
「それに、アルベドをモモンガさんの嫁に押し付けてやるんだ〜なんて昔言っていましたね。ねえ、ペロロンチーノ」

「そうそう、言ってた言ってた!」

「ああもう!わかりましたよ!そこまで言ってくれるなら僕だって腹をくくりまます!……………てか、寝取り属性まで持ってたなんて初耳なんですが」

全員の生暖かい視線に耐えられず、モモンガはすぐにコンソールを閉じ、玉座に深く座った。そんな彼の様子を見て笑いながらイズナ、ぶくぶく茶釜、ペロロンチーノの三人は玉座の前に移動した。

モモンガは玉座の間に掛けられた旗を指差し、プレイヤーネームを呟く。名前を読んでいく度に、ペロロンチーノ、ぶくぶく茶釜、イズナの3人は名前が呼ばれると『はい!』と小学生のように返事をした。

「……………そろそろ時間ですね」

モモンガのその言葉で皆は腕の時計に目を向ける、刻一刻と終わりの時が近づいてくる。

「……………また、会えますかね。モモンガさんや皆さんに」

「……………さあ、わかりません。——ですが、いつかきつと、会える日が来

るでしょう。そう信じてそれまではさようならです。イズナさん。それに、ゲームでは会えなくても、近々リアルで会えますしね」
「——はい。それもそうでしたね、モモンガさん。また会いましょう。」

モモンガとイズナは表情は変わらないが嬉しそうな顔をしている気がした。

「モモンガさん、最後をお願いします」

ペロロンチーノはそう促し、モモンガはそれに答えた。

「アインズ・ウール・ゴウンに栄光あれ!!」

「二アインズ・ウール・ゴウンに栄光あれ!!」

それと同時に時計が0000を表示、1、2、3、4……と更に時を刻んでいく。

イズナ、モモンガ、ペロロンチーノ、ぶくぶく茶釜は互いに顔を見合せ時計を見たり、辺りを見回している、強制ログアウトさせられるはずが、今もこうしてユグドラシルの世界にいる。

「……どういうことだ?」

「……ん〜。ユグドラシルIIのだったり?」

「それなら何かしらアナウンスがあるでしょ、はっ!まさか某二次小説のような電脳誘拐の可能性も……」

「いやいや、流石にそれは無いと思いますよ?ぶくぶく茶釜さん。もしも、それなら運営側からなにか絶対にあるでしょうし……たぶん」
モモンガ、ペロロンチーノ、ぶくぶく茶釜、イズナの四人は各々の考えをのべるがどれも当てはまる気がしない、コンソールを開こうにもどうもできず、ログアウト、GMコール、強制終了と試していたが、どれも機能しない。

「どうかなさいましたか? モモンガ様?」

そんな混乱の中、初めて聞く女性の綺麗な声で作業が止まった。

——その声はNPCであるアルベドから発せられていた。

2話

「何か問題がございましたか、モモンガ様？、至高の御方々？」

アルベドが問を繰り返す、予想していなかった出来事に皆が固まり、思考停止している。

「失礼いたします」

アルベドが立ち上がりモモンガのすぐそばに移動し、

「何かございましたか？」

——と覗き込むようにその美しい顔をモモンガに向ける、モモンガの鼻腔を、程よく甘い香りがくすぐった、その香りがモモンガの思考を再起動させ加速させていく。

「いや…なんでもない……」

アルベドはNPCだ、NPCがこのように意思を持ち自らの口で言葉を発することは無い、それに匂いは法律でダイブゲームでは再現してはいけなさとされている。

「……………いかがされましたか？」

やけに近い、お互いの吐息が重なりあうほどの距離までモモンガに近づいたアルベドは、美しい顔を可愛らしく傾けてくる、間近に迫った美貌にせつかく冷静になり始めていたのに、その冷静さがどこかに飛んでいきそうだ。そんな感情にすこし慌てつつも冷静に対処するモモンガ

「…………GMコールが利かないようだ」

アルベドの潤んだ瞳に吸い込まれ、ついNPCに相談してしまう。これまでのモモンガの人生で、異性にここまで近づかれたり近づいたりしたことがなく、作り物のNPCだと知っているはずなのに、まるで生きているような自然な表情の動きが、モモンガの心を揺さぶっていた。

しかしそんな自らの感情の動きは、抑制されるように沈静化している、モモンガは大きな起伏が起ころなくなった自分の心に一抹の不安を感じていた。

だが、これが元のゲーム——ユグドラシルのアンデット種、特有の

精神活性化強制停止と似たような現象であることはすぐにわかった。モモンガは一度頭を振って思考を切り替え、アルベドの顔を見た。「……お許しを、無知な私ではモモンガ様の問いであられる、GMコールというものに関してお答えできません、この失態を払拭する機会をいただけるのであれば、これに勝る喜びはございません、何なりとご命令を」

会話をしている、間違いない。

その事実を理解したとき、ここにいる皆が驚愕に襲われた。

確かにNPCに意志があり、生きている、会話も問題なく行える、だがそこでアルベドだけが特別なのだろうか？、という疑問が浮かんだ。

モモンガの視線はアルベドから、いまだ控えている執事と六人のメイドに移る。

「セバス、玉座の前に」

「はっ！」

セバスが玉座の前の皆の横に並び礼をとる。

「大墳墓をでて、周辺地理を確認せよ、もし知的生物がいた場合は友好的に対応しろ、行動範囲一キロに限定、戦闘行為は極力避けろ」

「承知いたしました、モモンガ様」

本来は本拠地を守るために創られたNPCが外に出られるという、ユグドラシルでは不可能なことが可能になっている。

モモンガはスタッフ・オブ・アイNZ・ウール・ゴウンから手を離す。

すると、スタッフは中に浮き、物理法則を完全に無視したような光景だが、これはゲームのままのようだ、ユグドラシルでは手を放すと空中停滞するアイテムは珍しくない。

モモンガは腕のを組み、思案しながら辺りを見回した、視線の先にはギルドメンバー3人にアルベド、先ほどまでモモンガの後ろにいたセバスに、少し離れた場所で綺麗に並んで立っているプレアデス6人。

とりあえずは上位者として行動しておけばいいだろう、何か問題が

起きた場合はギルドメンバー達と相談して決めればいい、そうと決まれば行動第一だ。

モモンガはスタッフを手に取り、声を張り上げた。

「プレアデス達よ、これから九階層に上がり、八階層からの侵入者が来ないか警戒に当たれ。直ちに行動を開始せよ」

「畏まりました。モモンガ様」

静かな部屋に声が響き、セバスと戦闘メイド達は玉座に座るモモンガと、そばに居たギルドメンバーそれぞれに跪拝すると、一斉に動き歩き出す。

巨大な扉が開き、セバスとメイド達の姿が向こうに消え、自然に閉まる。

そしてモモンガは、最後に残ったNPC、アルベドに視線を向けると、すぐ側に控えていたアルベドは優しい笑みを浮かべ、モモンガに問いかける。

「ではモモンガ様、私はいかがいたしましたでしょうか？」

「あ、ああ……、私の元まで来い」

「はい」

心のそこから嬉しげな声を上げて、アルベドがにじり寄っていく、モモンガ以外の者から見れば愛しい人に呼ばれ浮かれているように見える。

「触るぞ」

「あつ」

モモンガは手を伸ばし、アルベドの手首に触れる、

トクントクンと繰り返される鼓動、それは生物なら当たり前のものである。

モモンガに触れられ、アルベドの頬は紅潮し、体温が上がっていく。普通なら有り得ない話だ。NPCであるなら喋るところか頬を染めるなどといった表情は出来ないはずだ。ましてや、相手はAI。AIにはそのような機能は付いていないからだ。

モモンガは更に行動を始める。次の——そう、最後の一手。これを確認すれば、すべての予感が確信に変わる、今自分達が置かれている

状況、現実と非現実の狭間から、その天秤がどちらかに傾く。

だから、これはしなくてはならないことだ。

モモンガは意を決して口を開く。

「アルベド……む、胸を触っても良いか？」

「え？」

「「はい？」」

空気が凍ったようだった。

アルベドは目をぱちくりとさせ、ギルドメンバー達は一瞬あつげに取られるも、モモンガが確認しようとしている事に察しがつき、納得したような顔をした。

そんなモモンガは言ってから、悶絶したい気分に襲われていた。

仕方無いとはいえ、女性に向かって何をいつている。自分は最低だと叫びたい気分だった。

上司としての権威を利用したセクハラなど最低で当然だ。

しかし仕方が無い、そう、これは必要なことなんだ！

自分に強く言い聞かせ、精神の安定化を試みる、上位者としての威圧を精一杯に込めて言う。

「構わにや……ないな？」

だが、モモンガは自分の想いも虚しく、盛大に噛んでしまい、緊張しているのがバレバレだった。

そんなモモンガの言葉に、ギルメンは呆れ、アルベドは花が咲いたような輝きを持って微笑みかける。

「もちろんです、モモンガ様、どうぞお好きにしてください」

アルベドがぐつと胸を張る、豊かな双胸がモモンガの前につき出された。

もし唾を飲むということが出来たなら、確実に何度も飲み込んでいただろう。

大きくドレスを持ち上げている胸、それを今から触る。

ギルドメンバー、イズナは呆れ、ペロロンチーノは挙動不審なモモンガを見てニヤニヤしており、ぶくぶく茶釜の表情は分からないがペロロンチーノと同じ雰囲気とする。

ふとアルベドを窺うと、なぜか目をキラキラさせながら、さあどうぞといわんばかりに胸を何度もつき出してくる。

モモンガは、緊張しつつも、ドレスの下には僅かに固い感触があり、その下で柔らかいものが形を変えるのがモモンガの手につたわる。

「ふわあ……あ……」

濡れたような声がアルベドから漏れる中、モモンガは実験を終了させた。

ユグドラシルに限らず、全年齢対象のDMMORPGであれば18禁に触れる行為は禁止だ、それを違反すればアカウント停止、最悪削除されかねない。

今回の行為は通常であれば警告が出てくるはずだ、だがそれが出てこない。

——仮想現実が現実になった。

受け入れ難い事ではあるが、こうなってしまうては受け入れるしかない、

よくよく考えてみると、モモンガにとつてはそう悪いことでは無いように思えてくる、家族も恋人もなく、ユグドラシル以外の趣味もなく、家と会社を往復する毎日……。

モモンガはようやくアルベドのふくよかな胸から、力なく手を下ろす。

十分すぎる時間揉んでいたような気がするが、確かめるために仕方が無かったことだとモモンガは自らに言い聞かせる。

決して柔らかかったから手が離せなかった、とかいう理由ではない、……おそらく。

「アルベド、すまなかったな」

「ふわあ……」

頬を完全に赤く染め、アルベドが体内の熱を感じさせるような、息を吐き出す。それからモモンガに問いかけて来た。

「……ここで私は初めてを迎えるのですね？」

「……え？」

モモンガは言葉の意味を一瞬だけ理解できなかった。

「服はどういたしましょうか？」

アルベドが矢継ぎ早に問いかける。

「自分で脱いだ方がよろしいでしょうか？ それともモモンガ様が？ ああ、私はとうとう愛しのモモンガ様と……私は最高に幸せでございますー！」

アルベドは完全に暴走していた。

「……あー、モモンガさん？ その、頑張ってくださいね？」

「モモンガさん、設定変更した責任はとってあげてくださいね」

イズナとぶくぶく茶釜はそう言い残すと巨大な扉に向かって歩き始めた。

最後に残ったペロロンチーノは。

「3クリックで終わらせちゃダメですよ」

そう言いながら親指を立てた。

「ちよつ、まつ！ よ、よすのだアルベド」

モモンガはあわててギルドメンバーを呼び止め、アルベドの説得を行う。

「は？ 畏まりました」

「今はそのような……いや、そういうことをしている時間はない」

「も、申し訳ありません！ 何らかの緊急事態だというのに、己が欲望を優先させてしまい」

ぱつと飛び退くと、アルベドはひれ伏そうとする、それをモモンガは手で抑える。

「よい。諸悪の根源は私である、お前のすべてを許そう、アルベド。それよりは……お前に命じたいことがある」

「何なりとお命じください」

「各階層の守護者に連絡を取れ、六階層の闘技場まで来るように伝えよ。時間は今から一時間後、それとアウラとマーレには私から伝えるので必要はない。

あと、シャルティアにはペロロンチーノさんの事は伝えなくてよ

い、ちよつとしたサプライズだ」

「畏まりました、六階層守護者の二人を除き、各階層守護者に今より一時間後に六階層の闘技場まで来るように伝えます」

「よし、行け」

「はっ」

少し早足でアルベドは玉座の間を後にした。

3話

「モモンガさん、流石ですね。どこからどうみても、魔王さまになってましたよ。あと、とんでもないことになりましたね」

「アルベド、モモンガさんに完全にホの字ですねえ、リアルでエロゲのようなことを始めようとするとは思いませんでした」

イズナとペロロンチーノはニヤニヤしながらそう言ってくる。

「あ、あれはつまらない冗談だったのに……まさか、こんなことになる」と知っていたら、あんなことはしなかった……お、俺はあ、タブラさんの作ったNPCを汚してしまったのかあ……」

モモンガは膝と手を床に付き嘆いている、そこにぶくぶく茶釜が寄り添い肩に手をかけ、

「過ぎたことを悔やんでも仕方ないよ。それに、タブラさんNTR属性もあつたはずだから問題ない所か、両手を上げて喜びそうかな」

「そうでしたね……ギャップ萌にNTR属性。流石タブラさんですよ。想像を絶する変態さですよ。まあ、むしろそれこそタブラさんなんですけどね」

ぶくぶく茶釜とイズナの、その言葉にモモンガは撃沈した。確かにタブラさんならあり得る、そう理解してしまったからだ。

「モモンガさんいじるのはこの辺にして、いろいろ試さないといけませんね。魔法やスキル、アイテムがちゃんと使えるのかとか、発動の感覚とかゲームとの差違もですかね。」

モモンガさんもそれが目的で闘技場を集合場所に決めたいですし」

ぶくぶく茶釜がモモンガの復帰を待ちながら言葉を続ける。

「まずはこのリングからですね」

イズナは自分の左手人差し指にはまっているリングを見る、リング『オブ・アインズ・ウール・ゴウン』、ギルドの紋章が刻まれた指輪、ギルドメンバーの証であり、大墳墓内、玉座の間とギルドメンバー達の部屋以外なら自由に転移することができる物凄いマジックアイテムだ。

すると、凹んでいた状態から復帰したモモンガとペロロンチーノ、ぶくぶく茶釜は頷き、リングに転移先である闘技場の通路を念じ、転移する。

ナザリック地下大墳墓・第六階層 闘技場への通路

「成功ですね」

イズナは辺りを見回しそう告げる、先程までの光景が一変し、周囲は薄暗い通路へと変わっている、ここは闘技場へと続く通路、

皆は歩き、光が指す方へと通路を進む、出口が近づくにつれ草木の匂いが鼻腔は入ってくる、強い青臭さと大地の匂い、それは深い森の匂いだ。

通路を出て視界に映ったのは、何層にもなる客席が中央の空間を取り囲む場所、円形闘技場があった。

モモンガ達は闘技場の中央に歩を進めながら、空を眺める、そこには真つ暗な夜空が広がっていた。

もし周囲に明かりが無ければ、空に浮かぶ星すらも見えたことだろう。

勿論、この場はナザリック地下大墳墓の第六階層、地中であり今見上げているのは偽りの空だ、ただ星が好きなどあるギルドメンバーによつてかなりのデータを割り振っており、時間の経過と共に変化する仕組みになっており、日光と同じ働きをする太陽すら浮かぶ。

モモンガ達は周囲に目をやる。たしか、ここにはぶくぶく茶釜が作り出した双子が居たはずなのだが……

「とあー」

4人で探していると、掛け声と共に貴賓席から跳躍する影、六階建ての建物に匹敵する高さから飛び降りた影は、空中で一回転し着地した。

「ぶー」

両手にピースを作る。

飛び降りてきたのは10歳ほどの子供で、幼い子供特有の少年とも少女とも取れる可愛らしさがある、金の絹のような髪を肩口で切り揃え、耳は長く尖っており、薄黒い肌、森妖精エルフの近親種、闇妖精ダークエルフと言われる人種だ。

「アウラか」

モモンガは登場した闇妖精の子供の名前を呟く。

ナザリツク地下大墳墓第六階層の守護者であり、幻獣や魔獣等を使役する魔獣使い（ビーストテイマー）、アウラ・ベラ・フィオーラ。

アウラは小走りにモモンガに近づいてくる、小走りではあるが獣の全速力と同等のスピードだ、瞬時に二人の距離が近づく。

アウラは急ブレーキをかけ、地面を削り土煙を起こす。

そして子犬がじゃれついてくるような笑顔を浮かべ、モモンガに挨拶する。

「いらっしやいませ、モモンガ様。あたしの守護階層までようこそ」

アウラは挨拶のあとモモンガの後ろの人影が気になったのか、覗くように体を右に傾ける。

「——あつ」

すると、アウラは視線の先には手を振るような感じで体を変形させているぶくぶく茶釜が居た。

「ぶ……ぶくぶく茶釜……さま？」

「ええ、そうだよ。久しぶり、アウラ」

アウラはふるえながらそう聴くと、ぶくぶく茶釜は優しく言った。

「ぶ……ぶ……ぶくぶく茶釜様あー!!」

アウラは、すぐさま飛び込んで行く。ぶくぶく茶釜は体をくねらせアウラを優しく受け止め、その頭を撫で始めた。

「久しぶりだね、アウラ。長い間留守にしてごめんね。」

マールもおいで！

ぶくぶく茶釜が呼ぶと、先程の貴賓席からもう一人、履いているスカートの裾を押さえながら飛び降りた。

マール・ベロ・フィオーレ、その容姿はアウラとそっくりだが、姉

より幾分大人しい。

マーレはテツテツテという擬音が似合いそうな速度で走ってくる。当然、全力で走っているのだろうが、アウラと比べるとかなり遅い。モモンガの元に付くと、

「お、お待ちせしました、モモンガ様……」

びくびくと、モモンガを窺うように上目遣いをし、モモンガの後ろにいるぶくぶく茶釜が気になるのか、ちらちらと視線がそちらに行く。

それを見たモモンガはマーレの頭を撫で、

「存分に甘えてこい」

そう言つてマーレをぶくぶく茶釜のもとへ行くように促す。マーレは一礼し、ぶくぶく茶釜の胸に飛び込んだ。

自分を創造したぶくぶく茶釜に甘えるアウラとマーレ。そのアウラとマーレを優しく包み、頭を撫でるぶくぶく茶釜、その光景は実にほほえましかった。

「微笑ましいいけど……卑猥な肉塊とじゃれ合う美少女2人……ふむ。いい！」

「うるさい。愚弟！」

それを見ていたペペロンチーノがそんな事を口走り、聞こえていたのか、ぶくぶく茶釜が怒った声で言った。

そんな2人を見ていたモモンガとイズナは、ただただ苦笑するしかなかった。

「……さて。そろそろ、いいでしょうか？ 御三方」

イズナの言葉に、ひとしきりアウラとマーレを撫で回したぶくぶく茶釜は、アウラとマーレから離れて、表情どころか顔がないのでわからないが、どこか満足そうな雰囲気を出していた。

「いや、もう充分に私の子供達とじゃれ合えたわ。うん。満足」

「えへへ。私もぶくぶく茶釜様と会えて嬉しかったです！」

「ほ、僕も、嬉しかった、です！」

どうやら、アウラとマーレも随分と満足そうだった。

「さて、モモンガさん。いまからスキルとか魔法とかいろいろ試さないといけないのではないですか？」

「……そうですね。なら早いとこやりませんか。」

モモンガとイズナが2人でコソコソと話していると、それを見ていたペペロンチーノとぶくぶく茶釜の2人が近づいてきた。

「おーい。2人で何をコソコソと話しているのかなあ？——はっ

！まさかモモンガさん……イズナちゃんに手を出して……！」

「ちよっ!? そんな事しませんよ!？」

「モモンガさん……ハレンチね♪」

「ええ!? ぶくぶく茶釜さんまで!？」

ニヤニヤしているペペロンチーノとぶくぶく茶釜のダブルモモンガ弄りに当被害者のモモンガは項垂れていた。

「あははは……。ペペロンチーノさん、ぶくぶく茶釜さん、そのような事はありませんから、モモンガさんを弄るのをそろそろやめてあげてくださいいね? ——それにまだ近くにはアウラとマーレもいますから。」

音遮断の魔法を使いこちらの声は聞こえていませんが、流石にモモンガさんのせつかくの威厳が台無しになりますからね。だから、これ以上はやめてあげてくださいいね?」

イズナが言うと、笑いながら2人はモモンガから離れた。

「いや、やっぱりモモンガさんをいじるのは楽しいですね」

「そうね」

「ペペロンチーノさん、ぶくぶく茶釜さん、本当にやめてくださいよ……こっちの心が持ちません……さつきからむっちゃ光ってるし」

モモンガは疲れた顔をしつつも、異形種系のプレイヤーに付いている精神作用無効の特殊能力がついておりそれが常時発動していた。

この能力は一定数の感情が高まったり下がったりすると落ち着かせるために発動する能力だ。

しばらく4人で今後についての話をして、その話が終わるとペペロンチーノとぶくぶく茶釜がこれから行う実験のため闘技場の観客席の方へ移動していた。それをみたイズナは音遮断の魔法を断ち切る。

それを見計らったのように、アウラが近づいてきた。

「それでモモンガ様何の御用でこの階層に？」

「ああ、コレの試し撃ちをしようと思っただけ。」

すると、モモンガの言葉にマーレが反応する。

「あ、あ、あの、そ、それがあの最高位武器、モモンガ様しかさわることを許されないという伝説のアレですか？」

それにモモンガは自慢気に頷くと説明をさせた。

「その通りだ。これが、スタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンだ」
モモンガがそう言うと、アウラとマーレは瞳をキラキラさせて、まるでヒーローに憧れる、子供（見た目は子供だけど…）の様な顔をしていた。

「コレこそ我々全員で作りあげた最高位のギルド武器だ。スタッフの七匹の蛇が啜えたそれぞれの宝石は、全てが神話級のアーティファクト。更に、この杖自体に秘めた力も、神話級を超越し世界級に匹敵するレベルだ。最も凄いのは、この武器本体に組み込まれた自動迎撃システムは——」

そんな様子を知ってか知らずか、モモンガは自慢そうに説明をしていた。

イズナはその様子を親と子供がじゃれている様に見えて、微笑ましく見ていた。

「……と、こんな事をしている場合じゃありませんでした。」

微笑ましく見ていたイズナだが、本来の目的を忘れかけていたので、慌てて意識を切り替えモモンガに話しかける。

「モモンガさん、話し込みたくなる気持ちは凄く分かりますが、ここは抑えてくださいね。でないと、日が暮れてしまいますから（モモンガさん！ 自慢したくなる気持ちはわかりますが抑えてください！

ほら、ペペロンチーノさんとぶくぶく茶釜さんも変な目でこつちを見てくださいよ）」

「む？……あ、ああ、スマンなイズナ（す、すみませんイズナさん！

危うく忘れかけてました。ありがとうございます！）」

イズナとモモンガは口を開けて喋りつつ、頭の中では『伝言（メッ

セージ』というプレイヤー特技で話していた。

「す、すごい！」

「凄いですよ！モモンガ様!!」

さらにキラキラと目を輝かせるアウラとマーレに思わず頭を撫でようと衝動にかられてしまい、慌てて意識を切り替え、伸びかけた手を引っ込めるイズナ。

観客席では遠目で見ていたぶくぶく茶釜が、あまりの可愛さに体をクネクネと動かして悶えていた。それを隣にいたペロンチーノは少し引いていたのだった

「そういうわけでここでスタッフの実験を行いたい。色々と準備をして欲しいのだが？」

「畏まりましたモモンガ様」

「ああ、それとアウラ。全階層守護者をここに呼んでいる。予定では後一時間もない」

「分かりました。ん？シャルティアもですか？」

「全階層守護者だ」

「はあ、分かりました」

そうしてアウラは準備に向かった。

今現在、藁人形の前にイズナは佇んでいた。

イズナはおもむろに右手を上げ、藁人形の方へと向ける。

「狐火」

ゴウウツ!!

手のひらから出た炎の玉が藁人形に着弾。藁人形が燃え尽きた。

何をしているのかと言うと、イズナとモモンガは、魔法やその他の、言わば自身の力の確認をしていたのだ。

『どうやら魔法は使えるようですねモモンガさん。後フレンドリーファイアも解禁されているようですよ?』

『そのようですね。フレンドリーファイアが解禁されたということは超位魔法は味方を巻き込むのでなかなか使えませんね。』

『……でも、イズナちゃん。こつちから見ても、ユグドラシルの時と比べて随分と爆発等が派手な気がするけど、イズナちゃんの“狐火”ってそこまで威力が大きかったっけ?』

『いえ、ユグドラシルでは、この“白面金剛九尾”……正確には、狐族のモンスター又は狐キャラのプレイヤーが使える初級の魔法なのですが、ユグドラシルではせいぜい、木で出来た一軒家程度の大きさの建物を燃やすか、level10以下のモンスターを倒す程度の威力しか無かったはずですよ。しかし、どうやら威力が上がっているのかわかりませんが、いまなら全力を出して射てばlevel30以下のモンスターならこれだけで消し飛ばせそうですね。……恐らく、ゲームのがリアルになった為かのか、種族値と相まって威力が上がっているのかなと推測します。あと、なによりもゲームではあり得ない現象だったもことが、現実になったことにより、なにが起こってもなんら不思議はなさそうですね』

『そうですね。わかりました。今後、魔法を使うときは鳴るべく魔力を調節する必要がありますね』

『そうですね。』
『ならさあ、私達ものちのちスキルとか魔法とか調べとかなないといけないね。』

『確かに、姉ちゃんの言う通りだな』

『ならこの場所で今度、私達4人で久しぶりに模擬戦しませんか?』

腕試しにもなりますし、なにより現実になったいま、いい運動にもなります』

『そうですね。それもいいでしょう……さて、次は私ですか』

『お?次はモモンガさんか、頑張ってください。モモンガさん』

『はい、ペペロンチーノさん』

『《根源の火精霊召喚(サモン・プライマル・ファイヤーエレメンタル)》
!』

そういつてモモンガさんが発動したのは、スタッフ・オブ・アイズ・ウール・ゴウンの7つの宝石に秘められた魔法の一つ、《根源の火精霊召喚(サモン・プライマル・ファイヤーエレメンタル)》

その余波で召喚した地点にあったのは消し炭と化した。

『……………みなさん』

『はい、なんでしよう。モモンガさん』

『なに？ モモンガさん』

『ん？ なんだモモンガさん』

『私の記憶が正しければ……。この魔法はこんな派手なエフェクト入っていましたっけ』

『いいえ。おそらくこれもまた、先程話した通り現実となった影響でしようね』

『そうだね。イズナちゃんの言う通りよ』

『まあ、俺も姉ちゃんとイズナちゃん同様、それしか考えられないよな』

4人は、《伝言》で喋りながら、魔法の確認をしていた。

「す、凄い！」

「うわぁ……………」

その凄まじい光景を、アウラとマーレは見ていた。

これだけの強力な召喚魔法となれば、普通はMPだけでなくなんらかのコストを支払って発動するものなのだ。

それをただMP——魔力だけで召喚し、使役しているのはスタッフ・オブ・アイズ・ウール・ゴウンの性能の凄まじさをまじまじと実感してしまった。さすがギルド武器なだけはある。

「プライマル・ファイヤーエレメンタル……………レベル80後半だ。アウラ、戦ってみるか？」

「い、良いんですか!？」

「あ、あの僕、しなくちゃいけないことを思い出したので」

「マーレツ！こんなチャンス、滅多にないんだよ!!」

「えええええ……………わかったよ、おねえちゃん……………」

モモンガの言葉に嬉しそうにする双子のダークエルフ。

モモンガが覚えている多種多様な攻撃魔法を試さず、杖に記録されたこの召喚魔法を使用した理由は、フレンドリーファイアの設定が外れているのかの確認も込められているのである。

ついついいつもの感覚で撃つて味方に誤射するなんてシャレにならない。ここまで現実的になってしまっていると、もはや間違いない可能事であろうが、それでも確認せずそのままにいるよりもよっぽど良いだろう。……そう考えた4人はアウラとマーレに悪いが、実験に付き合ってもらおうと思ったのだった。

おどおどしてるが、レベル的にマーレやアウラならば、それ程苦勞せず倒せる相手なのだ。危険も、ほどほど程度だろうと踏んでの実験だった。

闘技場の中心で、召喚された火の精霊と、アウラ達が構える。

「プライマル・ファイヤーエレメンタル！双子を攻撃せよ!!」

モモンガの命令と共に動き出した、アウラとマーレだった。

しばらく戦っていたが、戦闘はアウラとマーレのペースだ、余裕を持った攻防が続く。

ふとモモンガを見ると何も無いはずの空間に手を入れ、ごそごそと何かを探っていた、どうやらアイテムボックスに手をつ突っ込んでいるようだ。

空中に溶けるように根源の火精霊の巨体が消えていく。周囲に撒き散らされていた熱気も急速に薄れていった。

桁外れの破壊力と耐久力を持つ根源の火精霊だったが、アウラとマーレの前では意味がなかったようだ。

「うちの子達はすごいでしょ」

ふと声が聞こえた方をイズナが見ると、ぶくぶく茶釜を見ると、我が子を自慢し、胸を張っているのだろうが、体をグニユッと曲げたようにしか見えない。

再び闘技場へ視線を移すと、モモンガがアウラとマーレに水を飲ませ、二人の頭を撫でていた。

観客席に居たぶくぶく茶釜、ペロロンチーノはモモンガ達の所まで移動し、ぶくぶく茶釜が再びアウラとマーレの頭を撫で始めた。そこに声がかかる。

「おや、私が一番でありんす——か!？」

途中で驚愕の声をあげたのはシャルティア・ブラッドフォールン第1から第3階層守護者だ。

そのシャルティアは、胸が揺れるのも気にせずイズナの側に走って近づき跪いた。

「ご帰還しておりましたかぶくぶく茶釜様、イズナ様!心より歓迎致します—!」

「ありがとうございます。シャルティア」

「とんでもございません。至高のお方々のご帰還を歓迎するのは当たり前でありんす」

「いい心掛けですねシャルティア。さすがですね」

そう言いながら、イズナはシャルティアの頭を撫でた。そんなシャルティアの顔は女の子がしたらダメなほどとろけていた。

「……転移が阻害されてるナザリックで、わざわざへ転移門(ゲート)なんか使うなって言うの。闘技場内まで普通に来たんだろうから、そのまま歩いてくればいいでしょうが、シャルティア」

モモンガのすぐ側から呆れたような声が聞こえる。その凍りつかんばかりの感情を含んだ声音に、先程までの子犬の雰囲気は無い。あるのは満ちすぎてこぼれだした敵意だ。

その横ではマールが再び、ブルブルと震えだしている。少しずつ姉の側から離れていつているのはなかなか賢い。実際、アウラの豹変には、モモンガもちよつとばかり引いていた。

シャルティアはアウラを一瞥すると、イズナから離れ、すらりとした手をモモンガの首の左右から伸ばし、抱きつくかのような姿勢を取る。

「ああ、我が君。私が唯一支配できぬ愛しの君」

真つ赤な唇を割つて、濡れた舌が姿を見せる。舌はまるで別の生き物のように己の唇の上を一周する。

妖艶な美女がやれば非常に似合っただろうが、彼女では年齢的に足りないものがあり、ちぐはぐ感が微笑ましくさえある。だいたい、身長が足りないので、伸ばした手も抱きつくというより首からぶら下が

ろうとしているようにしか見えない。

それでも女性に慣れていないモモンガには十分な妖艶さだったが。困惑しているモモンガは、シャルティアの製作者であるペロロンチーノを見る。だが、ペペロンチーノは先程モモンガをからかった時と同じように親指を立てていた。

モモンガの視線の先が気になり、シャルティアもそちらを見る。そこには自分の創造主、ペロロンチーノが立っていた。

「そしてペロロンチーノ様、お久しゅうございます」

モモンガの首からぶら下がったまま言う。

「あれ!? なんかさっきのイズナさんと姉さんといまのモモンガさんの反応と随分違うくない?!

もつとこう、ぎゅつと抱きついてくるとか、耳元で色っぽく囁いたりとか。——はっ! こ、これがNTRか! NTRってやつか!」

ペロロンチーノが頭を抱えてうんうん唸っている。

するとシャルティアがモモンガの首から離れ、ペロロンチーノの抱きついて、その耳元で甘い声で囁く。

「冗談でありんす。ペロロンチーノ様、お会いしたかったです!」

「シャルティアアアア!!」

ペロロンチーノはすぐさま復帰し、シャルティアを抱き締めた。

「……あはは。ペペロンチーノさんも大概ですよね。そう思いませんか? ぶくぶく茶釜さん」

「そうね。まあ、愚弟だし仕方が無いわね」

ペペロンチーノを見ていたイズナとぶくぶく茶釜はそんな話をしている、その後ではモモンガが苦笑していた。

「いい加減にしたら……」

重く低い声に初めてシャルティアは反応し、嘲笑を浮かべながらアウラを見た。

「おや、チビすけ、いたんでありんすか? 視界に入ってこなかったから分かりんせんでありんした」

ぴきりとアウラは顔を引きつらせ、それを無視するようにシャル

ティアはマーレに声をかける。

「ぬしもたいへんでありんすね、こな頭のおかしい姉をもつて。こな姉からは早く離れた方がいいでありんす。そうしないとぬしまでこなになってしまいんすよ」

マーレの顔色が一気に悪くなる。シャルティアが自分を出汁に姉に喧嘩を売っていると悟っているためだ。

だが、アウラは微笑む。そして

「うるさい、偽乳」

爆弾が投下された。

「——んなっ?!」

素を出したシャルティアは随分と慌てていた。

「凶星ね！ だからわざわざ〈転移門（ゲート）〉を使ってやって来たんだ。急いで来たいのに盛りすぎて、走る度に胸がどっかいつちやうから〜」

アウラの言葉に狼狽えるシャルティア。そこにあるのは年相応の表情だ。それにたいしてアウラは邪悪な笑みを浮かべる。

「黙りなさい！ このちび！ あんたなんかまったく無いでしょーー?!」

シャルティアの必死の反撃。その瞬間、更に邪悪な笑みを浮かべるアウラ。シャルティアは押されるように一歩後退する。さりげなく胸をかばっているのがなんとどうか悲しい。

「……あたしはまだ七六歳だけど、あんたはアンデッド。成長しないから大変よねー。」

シャルティアはぐつ、と呻き、さらに後退する。アウラは亀裂のような笑みをさらに吊り上げ、もう一言追撃する。

「今あるもので満足したら？ ぷっ！」

「おんどりやー！ 吐いた唾は飲めんぞー！」

その台詞と同時、シャルティアとアウラが戦闘体勢に入る、

「平和だなあ」

「平和ですねえ」

「平和ねえ」

その光景を見ていたペロロンチーノとイズナとぶくぶく茶釜からそんな台詞がこぼれる。

「サワガシイナ」

声が飛んできた方、そこには何時からいたのか、冷気を周囲に放つ異形が立っていた。

二・五メートルはある巨体は二足歩行の昆虫を思わせる。冷気がまとわり付き、ダイヤモンドダストのように煌めく、ライトブルーの硬質な外骨格は鎧のようだった。

それはナザリック地下大墳墓第五層の守護者であり、凍河の支配者
コキュートス。

「御方々ノ前デ遊ビスギダ……」

「この小娘がわたしに無礼を働いた」

「事実を」

「あわわわ……」

再びシャルティアとアウラがすさまじい眼光を放ちながら睨み合い、マールレが慌てる。モモンガはさすがに呆れ、意図的に低い声を作ると二人に警告を発した。

「……シャルティア、アウラ。じゃれ会うのもそれくらいにしておけ」
びくりと、二人のからだだが跳ね上がり、同時に頭を垂れた。

『もうしわけありません！』

モモンガは鷹揚に頷き謝罪を受け入れると、現れたものに向き直る。

「良く来たな、コキュートス」

「才呼ビトアラバ即座ニ」

白い息がコキュートスの口器から漏れている。それに反応し、空気中の水分が凍りつくようなパキパキという音がした。

「オヤ、デミウルゴス、ソレニアルベドガ来タヨウデスナ」

コキュートスの視線を追いかけると、そこには闘技場入り口から歩いてくる人影が二つ。先に立つのはアルベドだ。その後ろに付き従うように一人の男が歩く。十分に距離が近づくと、アルベドは微笑み、モモンガに対して深くお辞儀をする。

男もまた優雅な礼を見せてから、口を開いた。

「皆さんお待ちせして申し訳ありませんね」

身長は一・八メートルほどもあり、顔立ちは東洋系、オールバックに固められた髪は漆黒、丸眼鏡をかけており、来ているものは三つ揃えであり、ネクタイまでしつかり締めている。

後ろからは銀プレートで包んだ尻尾が伸びている。

その男こそ 炎獄の造物主 デミウルゴス。

ナザリツク地下大墳墓第七階層の支配者であり、防衛時におけるNPC指揮官という設定の悪魔だ。

呼んだ皆が集まった。

モモンガを中心に、右にぶくぶく茶釜、左にペロロンチーノ、ペロロンチーノの少し後ろにイズナが立ち。

モモンガ達の目の前に、守護者達が並んでいる

「では皆、至高のお方々に忠誠の儀を」

「第1、第2、第3階層守護者、シャルティア・ブラッドフォールン。御身の前に」

「第5階層守護者、コキュートス。御身ノ前ニ」

「第6階層守護者、アウラ・ベラ・フィオーラ。御身の前に」

「お、同じく、第6階層守護者、マーレ・ペロ・フィオーレ。御身の前に」

「第7階層守護者、デミウルゴス。御身の前に」

「守護者統括、アルベド。御身の前に」

「第4階層守護者ガルガンチュア及び第8階層守護者ヴィクティムを除き、各階層守護者、御身の前に平伏し奉る。……………ご命令を、至高なる御身よ。我らの忠義全てを御身に捧げます」

それに反応し絶望のオーラを出しながらモモンガが答える。

「面をあげよ」

全員の頭が一斉に上がる。

「よく集まってくれた、感謝しよう」

「感謝なぞおやめください。我ら至高のお方々に忠義のみならずこの身の全てを捧げた者たち。至極当然のごごいいます」

「それと、どうやら至高のお方々はお迷いの様子。当然でございます。至高のお方々からすれば私たちの力など取るに足らないでしょう。」

しかしながら至高のお方々よりご下命頂ければ、階層守護者全員、如何なる難行といえども全身全霊を以って遂行致します。造物主たる至高のお方々、アインズ・ウール・ゴウンの方々に恥じない働きを誓います」

「」「誓いますー。」「」

アルベドの声に合わせて全員が唱和する。それを見たモモンガ達4人は少し前に忠誠を疑っていたことを恥じていた。

「ふむ。実に素晴らしいぞ、守護者達よ。お前達ならば私の目的を理解し、失態なくことを運べると今この瞬間、強く確信した」

モモンガは守護者全員の顔を見渡す。

「さて多少意味が不明瞭な点があるかも知れないが、心して聞いてほしい。現在、ナザリック地下大墳墓は原因不明かつ不足の事態に巻き込まれていると思われる」

守護者各員の顔は真剣で、決して微妙にも崩れたりしない。

その後、モモンガの説明が続く、ナザリックのあった沼地は無くなり、今は草原のど真ん中にあると、その原因は現在はいまだ不明で、セバスに見に行かせていること。これからのことを話していくのだった。

4話

「モモンガ様、戻って参りました」

モモンガの話が終わると同時に、セバスが帰ってくる。

「うむ。では、どうなっているのかを聞かせてくれ」

「はっ。まず、ナザリックの周辺ですが——」

沼地から草原が変わってしまっていることや、人工物も知的生命体が確認できなかったことなど、セバスは淡々と報告をしていく。

「次に各階層守護者に、聞きたいことがあるお前たちにとって私たち——創造主はどのような人物か？」

セバスの報告を聞いた後、最後にモモンガは自分達が守護者たちにとってどの様な人物かを問いかけた。

モモンガ、ペロロンチーノ、ぶくぶく茶釜と続いて最後に残ったイズナの評価を聞く

「では最後に……お前達にとって、イズナはどのような人物か？」

その問いに対してまずは、シャルティアが

「イズナ様は慈愛の結晶であり聖母でもありません。その慈愛を持ってすればどのような聖女や聖母でさえ裸足で逃げだすでしょう。それに、その実力もトップクラス。たとえばいかなるものもイズナ様の前では赤子も同然。まさに”武神”の名にふさわしきお方でありんす」

『そういうえば、イズナさんの時は、”武神”の二つ名を持っていましたっけ？』

『はい。主な武器は槍ですが、刀も扱うのでよく武者修行的な感じの戦いをやっていたら、いつの間にかそんなあだ名がついていました。』

コキュートスは、

「守護者各員ヨリモ強者デアリ、我が創造主ノライバルデアリ一人ノ武人トシテモ優レタ強サヲ持ツタマサニ武神カト。マサニナザリック地下大墳墓ノ絶対ナル支配者ニ相応シキ方カト」

『……ああ。イズナさんはよく武人武御雷さんとたち・みーさんのガチ前衛とPVPをやってましたっけ』

『ええ、懐かしいですね。あの2人はやはり強かった』

『そう言うイズナも充分強かったよね。前衛の主力メンバーでは4人いる中でも剣の腕なら、たつちさんに武御雷さんと続く主力メンバーだもんね』

『……いやいや。それほどでも』

『なに言ってるんだよイズナちゃん！ イズナちゃんは強いんだからな！ ましてやまだイズナちゃんを軽く超える”ナドレ”ちゃんもあるんだしな！』

アウラは、

「イズナ様は至高なる力を正しく振るえ、すぐく慈愛に満ち愛に溢れたお方です」

『慈愛に溢れすぎて”慈愛の女神”とも言われていましたっけ？』

『モモンガさん……その事はもう忘れてくださいイイデスネ？』

『あ、はい』

マールは、

「す、すぐく優しい方だと思います！」

『まあ、イズナちゃんはゲームでもリアルでも、凄く優しいからねえ』

『そうだよなあ。女神ーいや、聖母の名に相応しい娘だからなあ』

『……そ、そんなこと——って、娘って何ですか!?ペロロンチーノ！

確かに私はユグドラシルでは女の子ですが、リアルでは男の子です！』

『え？ 男の娘？』

『男の”娘”じゃないです。男の”子”です!? その前に、ほんと仲いいですね！息がぴったりですよこのやろー！』

『ええ、いいじゃない。実際リアルでもむちやくちや可愛いじゃないの。アニメ美少女レベルの可愛さなんだから。』

『だから私は……ああ、もう男の娘でいいですよ……もう——はあ』

デミウルゴスは、

「イズナ様は、慈愛に満ちナザリックの全ての物に対して慈愛を下さる方です。そして全てを超越した絶対的な力を持つ武神であらせられます」

『慈愛……笑顔……怒り……う、頭が！』

『……何ひとりで騒いでいるんですか、ペロロンチーノ』
セバスは、

「イズナ様は我が創造主のライバルとも言える友であり、武神であると同時に聖女の如くその慈愛を持ってナザリツクを照らす太陽のごとき御方かと」

『凄く恥ずかしくなるようなセリフですね』

『そ、そうですよね』

アルベドは、

「イズナ様は、愛しのモモンガ様の友であり、慈愛に満ちた私達の母なる存在であり、最高の主人であります。そして強くお美しく正にその美貌は女神ですら嫉妬するほどでございます」

「なるほど。各員の考えは理解した。今後も忠義に励め。では行くぞ」

そしてモモンガ、イズナ、ペロロンチーノ、ぶくぶく茶釜の4人は
転移していった。

転移することで移動してきた4人は、闘技場から玉座の間の扉の前に転移した。

「なんかすごい忠誠心でしたね」

「忠誠心が高すぎてひくわあ」

ぶくぶく茶釜とペロロンチーノの感想にモモンガとイズナが同意する、忠誠心は高い方が良いのだが、あれは高すぎるような気がする。「確かに、モモンガさんはともかく、途中でナザリツクを離れていた私にもあの高評価はやばいですね。それにしても、聖女や聖母：更には母なる存在ですか。」

武神はまだわかりませんし、太陽の様な暖かさは、私のこの九尾の狐は元太陽神でもありますのであながち間違っただけではないのですが……嬉しいような悲しい様な……なんとも言えない感覚ですね」

「まあ、こうして考えても仕方ない。守護者達の期待に応えられるよう対応する、ということでもいいですね？ では、手持ちのアイテムの確認などもあるので。ここで一時解散で」

モモンガの言葉に皆のが領き、各々の部屋に戻っていく。

同刻・第六階層 闘技場

「す、すごく怖かったね、お姉ちゃん」

「ほんと。あたし押しつぶされるかと思った」

「流石はモモンガ様。私達守護者にすらそのお力の効果を発揮するなんて……」

「至高ノ御方デアル以上、我々ヨリ強イトハ知ツテイタガ、コレホドトハ」

「あれが支配者としての器をお見せになられたモモンガ様なのね」

「ツマリハ、我々ノ忠義ニ応エ、支配者トシテノ才顔ヲ見セラレタトイウコトカ」

「確實でしょうね。それに、至高の方々はその力を全く受けていなかった」

「あたしたちと一緒にいた時も全然、オーラを発してなかったしね。すつごくモモンガ様、優しかったんだよ。喉が渴いたかって飲み物まで出してくれて」

アウラの発言に対して、各守護者からピリピリとした気配が立ち込める。それは嫉妬。その濃厚さは目視できる気がするほど。特に大きかったのはアルベドだ。手がプルプルと震え、爪が手袋を破りそうな気配すらある。

びくりと肩を震わせたマーレが若干大き目に声を発する。

「あ、あれがナザリック地下大墳墓の支配者として本気になったモモンガ様なんだよね。凄いやね！」

即座に空気が変わった。

「全くその通り。私達の気持ちに伝えて、絶対者たる振る舞いを取っていただけとは……流石は我々の造物主。」

至高なる四一人の中の4人。そして最後までこの地に残りし、慈悲深き方々」

アルベドの言葉に合わせ、守護者各員が陶然とした表情を浮かべる。

守護者にとって、自分達を作ってくださった創造主を護る事こそ指名であり、幸せであると考えている。そのため、そんな創造主をこれからもまた護れるという幸せにいろんな思いをよせ酔いしれるのだった。

そんな緩んだ空気を払拭するかのよう、セバスが口を開いた。

「では私は先に戻ります。モモンガ様がどこにいかれたのかは不明ですが、お傍に仕えるべきでしょうし」

「分かりました、セバス。モモンガ様に失礼が無いように仕えなさい。それと何かあった場合はすぐに私に報告を。特にモモンガ様が私をお呼びという場合は即座に駆けつけます。他の何を放つても！」

聞いていたデミウルゴスが困ったものだという表情を微かに取る。

「ところで……静かですね。どうかましたか、シャルティア」

デミウルゴスの言葉に合わせ、全員の視線がシャルティアに向けられる。見れば、シャルティアのみがまだ跪いている状態だ。

「ドウシタ、シャルティア」

再び声がかけられ、初めてシャルティアが顔を上げた。

その目はとろんと濁り、夢心地であるように締めりが無い。

「あ、あの凄い気配を受けてゾクゾクしてしまって。それに、イズナ様の美しさと武神としての威圧にあてられて……少うし下着がまずいことになってありんすの」

——その言葉に、まわりは静まり返った。

全員が何を言うべきか、そんな顔で互いを窺う。守護者の中でも最も歪んだ性癖を多数持つシャルティアの性癖の二つ、死体愛好癖（ネクロフィリア）と両刀（バイセクシャル）を思い出した守護者各員は処置無しと手を額に当てる。

そんな中、アルベドの嫉妬にも酷似した感情が、その口を開かせる。

「このビッチ」

この発言の後、言い争いに発展したのだが、他の守護者は、我関せず、と各々の話を始める。

その話はナザリック地下大墳墓の将来の話から、至高の方々御世継ぎ問題、つまり子作りが出来るかどうか……となっていく。

そもそも、ギルドの長であるモモンガはアンデットの中でも骨だけなオーバードロードなので、子作りができるのかすらわからないからだ。

だが、ずっと長でいれるかもわからない。なので後継者を作らなければならぬのだが、アンデットは子供を作れるのかわからず、その話をしていた。結婚に冠してもどうするべきかと話し合いをする。

しばらくすると、アルベドとシャルティアの言い合いが終わったのかこちらに戻ってきた。

どうやらモモンガとペロロンチーノに対しては一夫多妻制を取り、イズナと一応ぶくぶく茶釜に関しては本人が同意するのであれば関係を持つてもよい、となった。

何故、ぶくぶく茶釜は一応かというのは……ぶくぶく茶釜の性別が不明で、リアルでは女だがそんな事を一切知らない守護者たちは、女だとは聞いているので一応という扱いになった。

「さて皆さん。そろそろ私達も持ち場に帰りましょう。何時、賊が来てもすぐに至高の御方を守り、賊を対処できるように」

アルベドの一言により、守護者たちは各持ち場である階層へと移動していったのだった。

5話

—イズナ side—

私がいまいる場所は ナザリック第9階層の執務室。

ここは豪華ホテルの高級スイートルームのような作りの部屋。

中央には大きな執務机が置かれ、その横にL字になるように一回り小さな机が設置されている。

「草原ですねイズナさん」

「ほんと草原ですね、モモンガさん」

そんな執務室へと移動した私ことイズナとギルド長 モモンガさんの二人は、豪華な椅子に座りながら直径一メートル程の大きさの鏡に映る景色を眺めていた。

ここに来たのはあるアイテムの確認のためだ。いまここにいないペロロンチーノとぶくぶく茶釜は、ナザリックの各階層を散歩してくると言って何処かに行ってしまった。

【遠隔視の鏡（ミラー・オブ・リモートビューイング）】

この遠隔視の鏡と呼ばれるこのマジックアイテムは、指定したポイントを映し出すものであり、外の風景を見る分には何かと便利な代物です。

但しあくまで風景を見る限りだけの話であり、PKプレイヤーや敵対するギルドに対しては対情報系の魔法で簡単に隠蔽されたり、攻性防壁で手痛い反撃を食らうので、使いどころが難しいアイテムでもあるのです。

そんな、遠隔視の鏡に映る景色はどこまでも緑が続く草原でありました。

ナザリック周辺の地表を見渡してもそれは同じで、以前の薄い霧が立ち込める毒の沼地だった地形が跡形もなく消えていたのです。

ちなみに現在、モモンガさんは遠隔視の鏡の操作に苦戦しながら、何とか制御しようと試行錯誤を繰り返しています。モモンガさんの隣には執事のセバスが控えておりモモンガさんの作業を見していま

た。

ちなみに、この作業がなかなかの曲者のようで、この操作に携わつてから決して短くない時間が経過しています。

「なかなか難しいですね。せめて説明書とかがあれば良かったんですけど」

「仕方ないですよ、モモンガさん。こういうのは地道に行くしか……あら？」

モモンガさんが四苦八苦しながら必死に手を動かしていると、急に景色が変わった。

「おお、ついにやりましたね！ 流石はモモンガさんです」

「いやいや、それほどでもないですよ。さて、これでナザリックから離れたところまで幅広い場所を見れますね」

モモンガさんが達成感に満ちた様子で満足げに頷く。

そして、細かい操作をする中でコツを掴んできたのか、遠隔視の鏡を器用に操りながら景色を拡大していく。

「……？ 祭りですかね、モモンガさん？」

そこに映し出されたのは何やら忙しない様子で、建物から出たり入ったりを繰り返す村人達の姿であった。

「……いや、違います」

村人全員の顔は恐怖に歪んでおり、まるで何か恐ろしいものから逃げようとするように必死に足を動かしていた。

「……これは……」

モモンガさんが独り言のようにポツリと呟く。

見れば逃げ惑う村人達を追い回すようにして、甲冑を着込んだ騎士風の集団が剣を携えながら馬に乗って、村の中を荒々しく駆け巡っていた。

騎士風の男が右手に握った剣を天に向けて高々と掲げて、近くにいた村人の背中を目掛けて勢いよく降り下ろす。

——そう、それは殺戮であった。

無防備な背中を切られた村人は鮮血を撒き散らしながら地面に倒れる。

騎士風の男は事切れた村人を放置して、次の獲物を探すように手慣れた手付きで馬を操ると、逃げ惑う村人達を追い掛けていく。

「……ちっ」

モモンガさんは嫌なものを見たといわんばかりに舌打ちをする。

しかし、はつとしたように顔を上げると、隣にいた私に視線を向けてきた。

そんな私は、たぶんなんの感情もこもっていないような無機質な瞳で、目の前の殺戮を静かに見つめていると思う。なんとたって、私はこのような楽しんで殺しをしているような奴が昔から大ツ嫌いだつたからだ——しかし

「……イズナさん？」

恐る恐るといった様子でモモンガさんは、私に声を掛けた。

「……モモンガさん。私はいま……凄く怖いです」

私は暗い表情になり、顔をしかめる。

「目の前の殺戮ではなく、それを見ても何も感じない自分に対してです」

そう、私は元々同じ人が目の前で殺されているというのに、何も感じない自分にひどく驚いていた。確かに残虐を楽しんでいる者に対して怒りはある。でも、それだけなのだ。

普段ならとても平常心を保つことなど出来なくて、あまりの残虐な光景に卒倒してもおかしくないだろうし、それに動揺の一つも起こらない。ましてや、同じ人間を殺す奴らを許さない！っといった感情が出ると思いきや、ただ残虐しているな……としか感情が無いからだ。

そんな自分自身に対して、私は得たいの知れない薄ら寒いものを感じていた。

「モモンガさんはどうですか？　目の前で人が殺されているのを見て……」

私の問いにモモンガは言いづらそうに口をモゴモゴと動かしながらもゆっくりと答えた。

「俺も……イズナさんと同じで何も感じなかつたです。まるで画面越しに動物や虫同士のそれを見るような……そんな気分です」

とモモンガさんは、自分たちが本当に人間じゃない、異形の存在になつた実感をした。

ふと視線を鏡に戻し、そこに映し出されたのは騎士風の男に追われている二人の少女の姿であった。

「……………どうします？ 助けますか？」

「見捨てます。危険を冒してまで助ける必要はありません」

恐らく姉妹なのだろう、栗毛色の髪を三つ編みにした少女が妹らしき幼い子供を庇って、剣を携えた騎士の男に背中を切られていた。

このままでは二人とも殺されるのは時間の問題だろう。

姉らしき少女は背中から血を流してもなお、男たちの魔の手から妹を守ろうと必死に自身の腕の中へ隠そうとしている。

ふと私は、過去に死んでしまった両親のことを思い出した。私の両親は、昔から二人そろってお節介さんで、誰か助けを求める人がいれぱすぐに駆けつけるほどなお人好しさんだった。

だが、ある日両親は車で仕事に出かけていたが、その時に電車の信号に阻まれ車が止まっていたのだ。……………そう、それが両親の最後だったのだ。突然、電車の線路が壊れ電車が脱線したのだ。無論、あまりにも唐突な事に何もできず電車は数多くの車に突っ込み衝突した。巻き込まれた車は20台近く、死者は軽く50人を超えていた。

そんな両親もその中に含まれていたので死んでしまった。あの日ほど呆気にとられ泣き崩れた日はないだろう。人間という生き物は何んて儂く脆い生き物なのかと思つた1日でもあった。

——あれから7年もの歳月が流れた。私の心は完全に癒えた訳では無い。でも両親の事を思い出す度にある言葉が思い浮かぶ。

『誰かの助けが聴こえてくる。しかしその声に誰も気づかないし気づいても無視をする。誰も助けが来ない。——なら、私達が助けられればいいじゃないか。』

ただ、助けたいから助ける。そう、それでいいじゃないか』
それと同時に、たちち・みーさんの口癖も思い出した。

『誰かが困っていたら助けるのは当たり前』

そんな、ギルドメンバーの一人であるたちち・みーさんの言葉が脳

裏を過ぎる。

「……」

……と、その時

「なっ……たっちさん……」

モモンガさんの驚愕の声が耳に届いた。

「え？」

私はびっくりして振り向くと、そこにはアインズ・ウール・ゴウン最強の聖騎士たち・みーさんなどおらず、ただモモンガさんがセバスを驚いた表情で見つめていた。

「……？」

一瞬言ってる意味がわからず、頭の中がクエスチョンマークだらけになっている私だが、ある結論に至った。

そう、目の前にいるセバスこそ、たっち・みーさんが作り上げたNPCなのだから。

よく昔から”子は親に似る”という。おそらく、モモンガさんからすればセバスの姿にたっち・みーさんの面影を見たのだろう。そしておそらくだが、私と同じくたっちさんの口癖を思い出したのだろう。「誰かが困っていたら助けるのは当たり前……か。ふふ、そう、そうですよね。たっちさん。ありがとうございます。決心が付きました。」

そう言ったモモンガさんは大きく息をつき、微かな笑いと決意の表情で立ち上がった。

「恩は返します。……どちらにせよ、この世界での自分の戦闘能力をいつか調べなくてはいけないですしね」

そうつぶやくと、モモンガさんがスタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンを手取る。

「……何をするので？モモンガさん」

「あの村娘二人を助けます」

何の迷いもない声ではつきりとそう答えたモモンガさん。そんな迷いの抜けたスッキリした顔で何も喋らない私を見つめてくる。

「誰かが困っていたら助けるのは当たり前……ですよ。かつて、俺が異形種狩りに会い、PKされそうだった時、たっちさんはそう言って見

「ず知らずの俺を助けてくれました」

過去を懐かしむようにそう言ったモモンガさん。

たしかに、たっち・みーさんならそうするか。だってあのたっちさんだもの。たっちさんならきつと、いまの私たちの様に人間を他人事の様に見ても必ず助けるはずだよね……

——それに

（あの姉妹に、私と同じ様な思いをする事は絶対にさせない。力がなく最愛の家族を目の前でただただ呆然とするしかなかったこの思いを彼女達にしてほしくない——だからこそ、私の目の前ではそのような行為は絶対に許さん）

気がつけば私は、身体が勝手に動いていた。

「すみませんモモンガさん。私……ちよつとお先に行つてきます」

「えっ？　ちよつ?!　ツバキさん!!」

「いま、あの子達を助けられるのは私達だけです。なら、急いだ方がいいでしょ？　ねえ、ギルド長」

私は笑顔で言うのと、はっ!とした表情で固まるモモンガさん

「イズナさん……。わかりました!急いで行きましょう!」

そう言うのと、モモンガはアルベドに完全装備で来るように伝えた。

だが、姉妹は今まさに、止めを刺そうと剣が振り下ろされようとしていた。

「モモンガさん!!」

「はいー!」

私はモモンガさんに振り向き

「——先に行きます!」

「ええ、後から向かいます!」

笑顔でそう言った。そして、私はすぐさまアイテムボックスから自身の愛槍を取り出し装備すると、あるひとつの魔法を発動する。

『転移門（ゲート）』

これは距離は無制限で、失敗の確率が非常に低い転移系の魔法だ。視界が一瞬だけブラックアウトした後、先ほど遠隔視の鏡で見えてい

た景色へと変わるのだった。

6話

— 第三者 side —

村が焼け、家族が殺され、妹と2人で逃げる姉妹。しかし、2人の騎士が姉妹を襲い1人の騎士が剣を振り上げる。妹を庇おうと姉であるエンリは、妹を胸に抱き寄せその振り下ろされる剣を身体で受け止める。

いままで、さんざん逃げてきた姉妹の姉の背中を騎士は、自分の手を手こずらせたと言う理不尽な怒りに任せて切り裂く。後ろに目を向ければ剣を再度振り上げる騎士の姿が見える。妹を庇いながらエンリは二つのことを理解した。

一つは、あと数秒後には自らの命が確実に失われるだろうこと。そしてもう一つは、単なる村娘でしかない自分には、それに抗う手段が一切ないこと。

(……もう、ダメ……でも——)

——せめて妹だけでも助けたい。

その思いが激痛と諦めの感情の中での希望。何か、何か手段はないのか。妹を助ける手段を思案する。

しかし、何も浮かばない。ならば、剣をこの身に受け抜けなくすれば妹を助けられるかもしれない。ならばその可能性に私の全てを賭ける。

迫る剣になすすべがないと悟り、くる痛みに耐えよと目を瞑った。

——キーン！

……すると、突然、何か金属同士が重なる音が聞こえた。姉のエンリは来ない痛みと謎の金属音が気になって目を開ける。

すると、そこで目に写ったモノは——。

「——ふう、間に合って良かった」

艶のある黒髪に同じ色の瞳。その綺麗な瞳は自分達の方に向いている。そして、その女性は柔らかい優しい笑顔と、声で姉妹に話しかけていた。

「大丈夫？ まだ意識はあるかな？」

とても綺麗で優しい声と笑顔、そして頭を優しく撫でられ自分の頬が赤く染まっているのを感じる。ふと妹の方を見ると頬を赤く染めて自分と同じ反応をしているのに気がついた。

……そんな姉妹は、突然起こった出来事と、その笑顔にみとれて、放心状態だった。

その女性——八雲・N・イズナは、彼女たち姉妹が放心状態なのに不思議に思いながら苦笑しつつも、すぐに冷静になり後ろにいた2人組の騎士に体を向けてその2人の男を睨んだ。

「……おい、その雑種ども」

まるで心臓を直接掴まれたかのような、底冷える声と憤怒の顔によって、2人組の騎士は冷や汗が流れ恐怖し足が震えだす。

「お主ら、よくもまあ……この様なふざけた事をしでかすのだな。主らはそんなにも人を殺すのが好きなの？このか弱き女子を追いかけ回したのが、そんなに楽しかったの？」

ならば、私が汝らをいま殺しても文句は言えまい。それ程までにお主らは人を殺めすぎた。……理由無き殺しほど、妾の怒りに触れるものなど無いわ。

その身を——その命をもって、悔い改めろ！」

ヒュツ——ブシヤアアアア！

……………ドチャツ

すると、そこにいたはずの1人の騎士の上半身が飛んでいった。そして、すぐ近くに落ちてきた。……そう、切られたのだ。上半身と下半身が別れた騎士は何が起きたかわからないといった顔で息絶えた。

そして、殺したであろう張本人であるイズナの右手に握られた愛槍の刃は、血で赤く染まっていた。

「ひっ!?ひいひい!!」

すると、それを見たもうひとりの騎士が逃げようとするが——

「心臓掌握 《グラスプ・ハート》！」

ドサツ!

その騎士は、突然地面にうつ伏せになるように、前乗りにも倒れた。エンリは女性は別の男性の声が聞こえてきたので後ろを振り向い

た。すると、そこには大きな巨体に豪華なローブを付けた、顔が骸骨のモンスターがいたのだ。

姉妹はその人物から発せられる黒いオーラに畏怖していた。

まさにそのオーラを一言で表すなら『死』だ。絶対的で濃密な『死』がそこにいた。あまりにも恐怖に姉のエンリは妹を助けるべくいままでよりも強く抱きしめる。妹も同じ思いなのか、姉を強く抱きしめ返した。

それと、『心臓掌握』とは、モモンガが好んで使う魔法の一つだ。

対象を即死させる第九位階魔法。それは仮に抵抗されても意識を朦朧させるという副次効果がある。初手にそれを選んだのは、モモンガが一番得意な戦法だと、本人とイズナ、ここにはいないペロロンチーノとぶくぶく茶釜のギルドメンバーがよく知っているからだ。もしもそれがこの騎士に利かなければ、本気で逃走する方針に切り替えなければならなかった。

しかし、騎士はその魔法に対して抵抗することができず、心臓を握りつぶされ、糸の切れた人形のようにその場に崩れ落ちたのだった。

そして、それと同時にある事も2人は感じていた。

人が死んだ、いや、殺したにも関わらず、モモンガは何とも思っていないようだった。そしてそれはイズナも同じである。目の前で人が起きたというのに、心に動揺が一切生まれえない。非道な行為をしていた彼らに怒りを抱いていると言っても、異常なことだった。

しかし2人はあえていまはそのことを考えないようにする。

『……モモンガさん、一言いいですか?』

『はい、何でしょうか? イズナさん』

『はい。では……モモンガさん、さっきから絶望のオーラが出ちゃっています。それにモモンガさんの顔はアンデット、それも骨だけのオーバーロードなのですから正直いって、初対面の人間からしたら普通に怖いでしょうに。現にその姉妹がびびっちゃってますよ?——と言うよりも恐怖のあまりに失禁しちゃっていますし。解いてくれますか?』

『……え? ああ、ほんとだ。どうもすみません』

『まあ、いいですよ。今回は仕方がないですし。次からは気をつけてくださいね？特に、いまから村の方へと行くのですし』

『確かにそうですね。はい』

そう、メツセージで話しながらオーラをしまった。

そんな2人がやり取りを秘密裏にやっている中、モモンガが解除したことにより、姉妹は謎の重圧から逃れられたものの、命の危険が完全に無くなったわけではなく、むしろさらに危険になったかと思いいんりはよりいっそう、未だ胸の中で震えている妹を強く抱きしめた。

『どうやら、完全に怯えられているみたいですね。……どうしますか？モモンガさん』

『どうするって言われても……どうしましょうか？』

『……なら、私に任せてもらえますか？ 子供の相手はリアルで実家が別荘に孤児院をしていたのでなれますし、”白面金剛九尾”は特殊で異形種だけど人形を常にとれて、さらに狐種特有のスキルに『変化』という変身能力があるので、いまの”イズナ”の姿になれています。なのでここは、任せてくださいいね』

『あ、それなら任せますね。お願いします』

『はい、任せられました』

そんなイズナはふと姉妹へと視線を向けたが、未だ怯え警戒している姉妹を見て、やれやれ、とはため息を吐いて、モモンガの方へと歩み寄った。

「……まあ、そんなことよりも、これからの事を話しましょうか。

まずは、いま戦ってみて思ったことは、他の方の防御はわかりませんが、攻撃に関しては問題なさそうです。しかし、あれだけのスキルを使う必要はなかったですね。基礎戦闘能力だけでも十分なんとかなりそうですよ？……現に、私は一撃で殺していますし。多分、この程度の相手なら武器使わなくても素手でも殺せます」

「みたいですね。でも、もう少し確かめてみましょう。——中位アンデッド作成、死の騎士（デス・ナイト）」

そういつてモモンガがアンデッド作成という特殊技術を持ちいると、黒い靄のようなものが溢れ、騎士の死体にとりついた。死体がゆ

らりと立ち上がり、その体の中からしみ出した黒いタール状の何かが巨大な体を形作っていく。

「げっ、アンデッド作成の特殊技術はこんな風になるんだ……」

「この世界では色々と効果が変わっているようですね。……私も今度、モンスター造りを試してみようかな」

数秒後、そこに現れたのは身長二メートルを超える巨大な死霊騎士だった。デスナイトというそのアンデッドに対し、モモンガは命令を下す。

「デスナイトよ。この村を襲っている、その鎧と同じものを着た者を殺せ」

「ウオオオオオオオオオオオオオオ!!」

生者すべてを憎むというような雄叫びをあげ、デスナイトが駆け出していく。

……守るべき対象モモンガを置いて。

あまりに自然に駆けだされたため、止めるタイミングを逃した手をひらひらと揺らしながら、モモンガは啞然とした声をあげた。

「えー……盾になるモンスターが、守る対象を置いていつてどうするよ……命じたのは俺だけだよ……」

その言葉と仕草、半開きになった口が必要以上にシユールで、イズナは思わず吹き出してしまいそうになる。だが、モモンガの顔が自分の方を向くのを見て、イズナは慌てて咳払いをして誤魔化す。

「さてと、これからどうしましょうか?」

「そうですね…実験しなければならぬことはたくさんありそうですが……」

そういつて二人で話し合っていると、開きっぱなしになっていた〈転移門〉から黒い全身鎧に身を包んだアルベドが現れた。

「モモンガ様、イズナ様。準備に時間がかかってしまい、申し訳ありません」

「いや、いいタイミングだ。アルベド」

とつさに、魔王モードになったモモンガ。そんなモモンガとアルベドの話の隣でじつと見ているイズナ

「すべての伝達は済んでおります。ご指示を」

「うむ。いま生み出したデスナイトがどうなるかも踏まえ、実験を行う。と、その前に……怪我をしているようだな。イズナさん、お願いしますね」

「はい。わかりました」

そう言っただけでモモンガは言っただけで、イズナにポーシオンを差し出した。モモンガからポーシオンを受け取りつつ、イズナは姉妹に近づいた。びくり、と二人が体を震わせるが、イズナはあえて気にしないようにする。

両膝について、正座をするように座り、視線の高さを可能な限り揃える。子供を相手にする際には当たり前前の配慮で、子供好きで孤児院も開いていたツバサにとってはいつもの当たり前の事だった。

「ほら、もう大丈夫よ。安心なさい。これは治療のポーシオン。傷が治るから、さあ、飲みなさい」

イズナの種族は異形種ではあるが、モモンガとは違い、全身を白い甲冑に身を包み、艶のある濡れ羽の様な色の髪をポニーテールにして一つにまとめている。そして、母性あふれる優しい笑顔で姉妹に向けていた。果たして姉妹がどう思ったかは不明だが、なんとか安心させ、信じてもらうことはできたようだった。

イズナからポーシオンを恐る恐ると受け取りながらも一気に飲み干す。

「えっ、嘘……」

ポーシオンを飲みほして傷が癒えた村娘は、信じられない奇跡を見た。とばかりに驚いている。その元気そうな様子に満足し、イズナは離れた。……すこし、名残惜しそうにしながら。

「怪我は治りましたね。では、モモンガさん、後はよろしくお願ひしますね」

「わかりました。《矢守りの障壁（ウォール・オブ・プロテクション）
ロムアローズ》」

そう言うと、モモンガは姉妹に防御魔法をかけた。

「それとこれもやろう。」

さらにモモンガは角笛を姉妹に投げる。

「それは《子鬼將軍（ゴブリン・ジエネナル）の角笛》と言いまして、吹けばゴブリンが出てきて、お前の言う事を聞くはずだ。それを持っておくんだな」

そこに、モモンガが防御用の魔法を張り、さらには小鬼將軍の角笛というゴブリンを召喚して戦わせることができるアイテムまで与えられた姉妹は驚きと感謝でいっぱいだった。

「では、村を救いにいくとしようか。我が友よ」

姉妹の前だからか、やけに大仰な言葉でモモンガがイズナを促す。イズナは相変わらずの魔王モードのモモンガに苦笑しつつも、領いてその背後に続いた。

「あ、あの！ 助けてくださってありがとうございます！」

「ありがとうございます！」

そんな二人に、助けられた村娘が声をかけた。

「お、お二人のお名前は……なんとおっしゃるんですか？」

その言葉に、すこし考え、視線を交わしたモモンガとイズナは、誇りを持って応える。

「我が名を知るがいい。我こそが、アインズ・ウール・ゴウン！」

「同じくアインズ・ウール・ゴウンの友にして右腕。天臨の神命主 八雲・N・イズナよ」

去っていく二人の背に、娘たちは羨望に満ちた眼差しを向けていた。

……………が

「——ん？」

「……あら？」

突然、2人が何かに気がついたかのようにこつちを見てくる。突然のことにビックリはしたが視線が自分達を見ていないことに気づき、視線を辿り後ろへと視線を向けた。

するとそこには、2人が出てきた黒い渦の様なモノがあった。

しばらく監察していると、突然ニュツと腕が伸びてきた。腕の次に、片腕、顔、胴体、足……と、次々と姿を表した。そこにいたのは、

全身を茶色のような色をした鳥人間といった感じの生き物だった。

彼の名はペロロンチーノ。ギルド、アインズ・ウール・ゴウンのギルドメンバーの一人にして、エロに生きエロに死ぬ……と言った感じの変態さんである。とくに、幼女が好きで、あまりの好きすぎさに理想の幼女シャルティアを作った程だった。

「幼女が助けを呼んでいる、幼女が怖い思いをしている。そんな幼女を助けるべく参上つかまつった！」

我が名はペロロンチーノ！ 幼女を守りし守護戦士、ただいま参上！」

「ババーン！……といった効果音と爆発音が背後で流れていそうなポーズをとって、”きまつた”みたいな顔で満足気になっているペロロンチーノ。そんなペロロンチーノを冷めた目で見ているイズナとモモンガの2人。

すると、シュバつと音がしたと思えば、先程まで変なポーズをしていたペロロンチーノは姉妹の姉・エンリの片手を優しく持ち、まるで紳士の如く、片膝をつけて手を持っていた。

「さて、綺麗なお嬢さん。さっそくですが私に、あなたのパンツを見せてもらってもよろ——」

「——変態退散!!」

「バキイ!!」

「ゲフウ!!」

ズドドドドドドドドドドオオオン——……

イズナはトンデモナイ発言をしようとしたペロロンチーノを、持っていた愛槍の石突でペロロンチーノの顔めがけてバツトの様にフルスイングした。

ペロロンチーノは不意打ち気味に放たれた、あまりの衝撃と早さに反応出来ず20mほど吹っ飛んでいった。

「……ええ? えええ!!」

そんなエンリはあまりにも唐突すぎて頭が混乱していた。

「……はあ、まったく。あのド変態は」

イズナは物凄く呆れた顔で嘆息しつつも姉妹の方へと近づいた。

「ごめんね、怖かったでしょ？ もう大丈夫だから。お姉さんが守ってあげる。あの変ターコホン。あのエロ煩惱のド変態には近づいたらダメだよ？ 穢れてしまいますから。わかったかな？」

「は、はい」

「は〜い！」

緊張しながらも返事をする姉と、無垢な笑顔で元気に返事をする妹を見て満足気にするイズナ。

そんな様子を見ていたモモンガは、微笑ましくイズナと姉妹を見ながら、今後について頭を悩ませるのだった。

7話

——一方その頃、モモンガとイズナがペロロンチーノに呆れている時、デス・ナイトは創造主のモモンガの言葉を忠実に守っていた。そう、そこはエンリ姉妹を含めた村人が住んでいた集落。そこでは狩る側と狩られる側が逆転していた。

「オオオオアアアアアアア!!」

ビリビリと大気が震える。それに合わせ眼前の化け物——デス・ナイトが一步前進した。

我知らずに2歩後退してしまう。

鎧が小刻みに震え、カチャカチャと耳障りな音を立てる。

両手で構えた剣の先も大きく揺れる。無論1人ではない。デス・ナイトの周りを囲む、18名の騎士のすべてからだ。

誰1人として逃げ出さない。それは勇気があるからか？

それは違う。目の中に入れておかないと怖いのだ。一瞬でも目を離れた瞬間持っている剣で切り裂かれる。それが生物が持つ直感でどうしようもなく理解できるのだ。

ガチガチという歯がぶつかり合う音がそこらかしこから聞こえる。

ロンデス・デイ・グランプは己の信仰する神への幾度かになる罵声を呟く。恐らくこの数十秒で一生分以上の罵声を飛ばしただろう。神が本当にいるならまさにいまこそ現れ、邪悪を消去すべきではないか。何故、敬遠なる信徒であるロンデスを無視するのか。

神はいない。

そんな戯言を囁く無心者を馬鹿にしてきたが、本当に愚かだったのは自分では無いだろうか。

「ひああああー!」

籬が外れたような甲高い悲鳴が辺りに響く。円陣を形成していた騎士の1人が圧倒的恐怖に耐えかね、声を上げながら後ろを見せて逃げ出す。

何かの線が切れれば、ギリギリと音が鳴るほどまで引き絞られた緊

張感は、一気に崩壊へと流れるだろう。普通ならそうだ。だが円陣を構成する騎士の中に1人も共に逃げようとする者はいなかった。

黒い風がロンデスの視界の隅で巻き起こった。

逃げ出した騎士は元いた場所より遠くに逃げようとしたが、瞬間、おぞましい音を立てた後2つに分かれる。

右半身と左半身に別れ、大地に転がった。嘔きあがった血が騎士を切り裂いた存在を濡らす。臓物の酸っぱいような臭いが周囲に広がり、ピンク色の内臓がどろりと断面からこぼれ落ちた。そして、その地面を赤い血で染め上げ、血の水溜りを作り出した。

「クウウウウ」

フランベルジェを振り下ろした姿勢で、血を浴びたデス・ナイトの目が細まり、高く唸った。

それは、まさしく歓喜の声。

腐り落ちかけた人の顔でもそれぐらいは読み取れる。

——そう、デス・ナイトは楽しんでいるのだ。殺しというものを……。

奴は、楽しんでいる。まるで、自らをこの様な姿にした者達への復讐と、その者達を殺して自らと同じ姿（運命）にするために。

目の前には、自分達よりも絶対的上位者——殺戮者がそこにいた。

ロンデスは救いを求め、視線をわずかに動かす。

そこは村の中央。広場として使われるその場所の周りに、ロンデスたちが集めた40人弱の村人たちがおびえた表情でこちらを伺っていた。何かあったときに使用される、ちよつとだけ高くなった木でできた質素な台座の後ろに子供達を隠し。

子供たちの幾人かは棒を持っているが構えてはいない。あまりの怯えのため、握っているのが精一杯なのだ。

ロンデスたちはこの村を襲撃した際、四方からこの村の中央に集まるように村人を駆り立てた。

誰ひとりとして残さないと、家々を荒らし焼き払い、逃げ惑う村人達を老若男女問わず、殺していった。逃げ惑う人間を殺し、泣き叫ぶ

子供を殺し、抵抗する男達を殺した。

虐殺は多少手間取ったりもしたが順調に進み、村人の生き残りを順調に一箇所に集めつつあった。

集めたら後はまとめて適度に殺し、幾人か逃がして終わり——それはずだった。

そして騎士の一人が村人を切ろうと剣を振り上げた瞬間

ブシューウウウ——……

その騎士の上半身が消え、鮮血が降り注いだ。そして死んだ騎士の代わりに後ろには、黒い鎧を身に着けた巨大な騎士と両手には騎士を切り殺したとされる刃を持っていた異形な生き物がいた。

「な、なんだこいつは!？」

騎士の一人が叫ぶと、まるで合図だったかのように黒い鎧の騎士が「オオオオオオアアア——!!」

と叫び騎士たちに攻撃を始めた。そしてさっきまでいた両手が刃の生き物も騎士に攻撃し始めた。

ロンドスはその瞬間を覚えている。

強烈な印象を与えたあの光景。

遅れて広場に逃げ込もうとした村人の1人を、後ろから切りつけようとした仲間の騎士が、彼が突然空中に舞ったのだ。何が起こったのか、あまりに非常識すぎて理解できなかった。

全身鎧の騎士が、何10キロも重さがある大の大人の騎士が、いとも簡単に吹き飛び、地面に落ち、それからピクリとも動かない。

そしてその騎士がいた場所に黒く巨大なものがいた。自分たちの仲間を吹き飛ばした巨大な盾をゆっくりと下ろしながら。

——それが絶望の始まりだった。

最初は巨体から発せられる死の声と、圧倒的な強さに怯えながらも切りつけた。

しかしその身をまとう鎧には、相手の攻撃や盾の防御を幸運にも抜けて切り付けても、傷一つ付かない。

それに対しデス・ナイトは剣を使わずに、盾で遊ぶように——いや事実遊びながら騎士たちを吹き飛ばした。死なない程度の強さでだ。

そのためか、変に生きながらえて、壮絶な痛みに苦しんでいる仲間達が、そこにはいた。

あのデス・ナイトが本気を出せば、全員で四方に散っても追いつかれ殺されると。

死ぬしかない。

兜の下に隠れて見えないが、皆が皆同じことを考えているだろう。辺りに響くすすり泣く声。成人した男達があまりの恐怖に子供のように泣いているのだ。

「神よ、お助けください……」

「神よ……」

幾人から嗚咽に混じって呟くように聞こえてくる。ロンデスも気を抜くと、跪き、神へ祈りとも罵声ともしれないものを送ってしまいうそうになる。

「ぎ、きさままら！あの化け物を抑えよ!!」

引きつるような声がした。音程の狂った賛美歌のような耳障りな声。

それは真つ二つにされた騎士の——デス・ナイトの直ぐ傍にいた騎士が上げたものだ。あまりの声質の変化にそれが誰か分からなかったが、あんな口調で喋る男は1人しかいない。

……ベリユース隊長。

ロンデスは眉を潜めた。

性質は1言で表すならカスだ。

娘が逃げていくところを下種な欲望を感じ追いかけてみたら、父親だろう村人ともみ合って、助けを求める。引き離してみれば、八つ当たりの感情で村人に何度も剣を突き立て、その生き娘を捕まえ、父親の前で見せ付けるように強姦して遊ぶような——そんな男だ。

だが、国ではある程度の資産家で、この部隊にも箔を付ける為に参加した、隊長なんて言葉はこいつのためにあるんじゃない。それぐらい隊でも嫌われている。

「俺は、逃げるぞ！こんなところで死んでいい人間じゃない！おまえら、俺の盾になれ！そして時間を稼げ！俺が逃げる時間を稼ぐ

んだ！」

誰も動くわけが無い。当たり前だ、今はどうすればあのデス・ナイトが自分を目標にしないか、頭を下げて嵐が通り過ぎるのを待つような状況。特に好かれてもいない男のために命を懸けるものか。

「ひいひいひい！」

デス・ナイトがゆっくりとベリユースに向き直る。

あんな近くで叫べただけ大したものだ。意外に肝っ玉が据わっていたのか？ ロンデスはあまりにも暢気なことを考えてしまう。

「かね、かねをやる。200金貨！ いや、500金貨だ！」

たしかに、普通なら飛びつくような大金だ。だが、それは、いまの状況では誰ひとりとして食いつかない。

なぜかって？ 簡単な事だ。いまの状況を例えるなら、500メートルの高さの絶壁から飛び降りて助かったら金をやるといっているのと同じ語だ。

誰も動こうとはしない。

いや、たった1人。半分だけ動いたものがいた。

「オボボオオオオオ……」

左右に分かれた騎士の右半身だけが動き出し、口から血の塊を吐き出しながら、ベリユースの足首を掴んだのだ。

「——おぎやああああ!!」

ベリユースの絶叫。周囲を取り囲む騎士、その光景が見えていた村人達の体が引きつる。

だが、これはモモンガたちユグドラシルのプレイヤーなら何でもない事だった。

従者の動死体へスクワイア・ゾンビ。

デス・ナイトの剣による死を迎えたものは永遠の従者になるという。ユグドラシルでは、デス・ナイトがモンスターを殺した瞬間、同じ場所に殺したモンスターと同レベルのアンデッドが出現するようシステム上設定されている。

ユグドラシルというゲームを知っているものなら何でもない光景だが、何も知らないものからすれば悪魔の所業だ。

だが、もちろんだが、そんな事を知らない彼らにとってソレは、恐怖の何者でもなかった。

ベリユースの絶叫が止み、糸が切れたように仰向けに崩れ落ちる。気を失ったのだろう。デス・ナイトは無造作にベリユースの横に立つと、その漆黒の具足をベリユースの胸に下ろした。

その足にすさまじい力が掛かっていくのがはたから見ても理解できなかった。留め金のはじけとび、金属の鎧がミシミシと悲鳴を上げる。

「——お、おおあああああ——」

苦痛で意識を取り戻したベリユースの絶叫——。

「たじえ、たじゆけて！ おねがいます！ なんでもじまじゆ！」

両手で必死にデス・ナイトの具足を除こうとするが、胸から生えたかのごとくピクリとも動いていない。

「おかね、おおああ、おかねあげまじゆ、おええええ、おだじゆけて——」

悲痛な叫び声を上げるがそれでもなお剣をその身に突き立てるデスナイト。

「いだいだおがおがねあげまおげねあげまおがねおがねええ」

金属の悲鳴が止み、木の枝をへし折るような軽い音がいくつも響き、それから周囲に血が飛び散った。刺されてもなおお金を叫んでいたベリユースの声は無論、途切れた——。

「……ひ、ひい!？」

「かみさまああ!!」

その光景に錯乱したように悲鳴が騎士の間からいくつも上がった。逃げたいがその瞬間殺される。でもここにいたら死より惨いはめになる。思考は回転し、体は動かない。

「——落ち着け!!!」

ロンデスの咆哮が悲鳴を切り裂いた。時が止まったような静けさが生まれる。

「——撤退だ！ 合図を出して馬と弓騎兵を呼べ！ 残りの人間は笛を吹くまでの時間を稼ぐ！ あんな死に方はごめんだ！ 行動開始——」

騎士は一斉に行動を開始した。白紙になった頭に命令が入ったことよって、それだけを考える脳になったがゆえの完璧な行動だ。これほどの一糸乱れぬ動きは二度と出来ないだろう。

連絡を取りあうための笛を持ってきている騎士の数は3人。現在、この場に来ているのは1人。この1人を守らなくてはならない。

数歩下がった騎士が剣を放り捨て、背負い袋から笛を取り出し始める。

「オオオオアアアアアア!!」

それに反応するようにデス・ナイトが駆け出す。——目標は笛を持った騎士。何をしようとしているのか理解している、それは充分な知能があつて行動だ。

漆黒の弾丸は飛ぶかのごとく肉薄する。何人もその前に立ちふさがれば弾き殺されるだけだ。それは誰の目から見ても当然のごとく映る。しかしながら騎士達はその前に壁となつて立ち塞がろうとした。恐怖をより強い恐怖が塗りつぶして動いているのだ。

盾が振るわれ、騎士の1人が吹き飛んだ。

剣がきらめき、騎士の1人の上半身と下半身が分かれる。

「ひあ——」ドサツ

「たすけ——」ブシヤアアア

再びまた盾が振るわれ、騎士の1人が吹き飛び、上段から振るわれた剣が受けた剣ごと騎士の体を2つにした。

ロンデスは漆黒の暴風が眼の前に駆けてくるのを殉教者の心で待ち構える。

「おおお!!」

そしてフランベルジェが振るわれ、ロンデスの視界がくるくると回る——。

眼下に頭を失い、崩れ落ちる自らの体があつた——。

そんな、一方的な虐殺が起きている村があるすぐ側の森の中で四つの人影があつた。

そう、モモンガ改めアインズと八雲イズナ、そしてお付きのアルベド（フル装備）＋何故か付いてきたペロロンチーノだったのだ。

「うむ。デス・ナイトは正常に動いているようだな。（うわあ、可哀想なぐらい一方的に殺られていますね。まあ、誰が死のうが関係ありませんが）」

「そうですね、モモンガさん。どうやら、私達が手を出さなくてもよろしいそうですね。（仕方がありませんよ。それ程までに弱い人達だったということですよ。この世界に神がいるなら、同じ人を殺しすぎた報い——天罰つてやつでしようかね。）」

「ふむ、そうだな。（それよりも、この村に攻めてきている奴らが特別弱いのかどうかはわかりませんが、いまのところ脅威になりそうな敵は確認できませんね。防御力が低い代わりに攻撃力が高いのかと思えば、まったくそんなことはありませんでしたし。と、言うよりもデス・ナイトごときに一方的に殺られているほどですし、攻撃力もたいしてないでしょう）」

「（まあ、確かに派手に暴れているデスナイト程度がいまだに破壊されていないということはそのうなのでしょうね。）さて……モモンガさん」
「どうかしたか?」

「このままの姿では、村人はあの姉妹の様に余計警戒すると思うので、姿を変えなくてははいけません。モモンガさんの場合は最低でも顔だけでも隠さなければ……」

「……うむ、確かにそうだな。」

そう言ったモモンガは、アイテムボックスの中から無骨なガントレットを取り出した。それを両手にはめて骨の体を隠す。

『やれやれ。スケルトンのようなアンデッドを選択するプレイヤーは、ユグドラシルじゃ珍しくなかったんだけどなあ』

『仕方がありませんよ。ここは少なくともユグドラシルの世界ではないのですから。』

普通に喋りつつも、メッセージで密かにやり取りをするモモンガとイズナ。

モモンガの言う通り、ユグドラシルでは見目はともかく、自然と付

与される様々な状態異常を無効する能力はゲーム的に魅力で、選ぶプレイヤーは比較的多かった。だからいままで気にしていなかったのだが、こちらの世界に住む者が怯えるというのなら、対策をしなければならぬ。

『私も顔を隠さなければいけないでしょうか？あと、この鎧も……』

イズナはメッセージ内で、そんな事をつぶやくと……

『うくん。それはどうでしょう。イズナさんも私と同じ上位道具創造《クリエイト・グレーター・アイテム》があるじゃないですか。それで仮面でも服でも着ればよろしいのですが、元々、人間の顔を持ったイズナさんなので、顔を隠さず装備もそのままがいいと思います……それに、イズナさんは仮面やお面系統なら、ほとんどの種類を持っていませんでしたっけ？顔を隠すだけならそれで充分だと思いますよ……』

『ああなるほど……その手がありましたか。ありがとうございます、モモンガさん』

『いえいえ、どういたしまして』

『ではさっそく……』

イズナが空間に手を突っ込みゴソゴソと何かを探る仕草をしたあと、一つの仮面を取り出した。それは狐のお面だ。

この狐のお面は普通は何も無いが、狐種の異型種のプレイヤーが付けると”ある特殊効果”が付属される、種族限定で使える特殊アイテムなのだ。

『さすがは、化かすのに特化した狐種最強のイズナさん。とても似合ってますよ、それ』

モモンガはそう言いつつ、アイテムボックスの中から一枚の仮面を取り出す。顔を隠すためのアイテムだろう。イズナは見たことのない仮面だった。

『ありがとうございます、モモンガさん。このお面はお気に入りアイテムの一つなんですよ。……ところで聞いてもいいですか？それ、見たことのない仮面ですね。モモンガさん、その仮面はどういう効果か……あつ』

聞きかけてから、イズナは思い出す。ある時ユグドラシルで、いつだったか強制的に配られた呪いのアイテムの噂を。クリスマススイブの夜に既定の時間以上ログインしていると強制的に入手してしまうという、呪われたアイテム。

その名も”嫉妬マスク”。

モモンガは無言のまま、その怒っているとも笑っているとも泣いているとも判断のつかない不思議な仮面を装着する。そして、じっとイズナを見つめる。その奥にはそもそも眼球すらないはずなのに、イズナはその仮面の奥からはつきりとした嫉妬の視線が自分に向けられているのを感じていた。

「……本当に、ごめんなさい」

その視線に耐えきれず思わずメッセージを忘れ声を出し、深々とイズナが頭を下げる。

『……いえ……いいんですよ。たしかにいままでクリスマススイブの時はイズナさんは必ずいませんでしたから。持つてるわけじゃないですよね』

モモンガはイズナにたいし、嫌味のような嫉妬の様な声でそう言った。

すると、モモンガの言葉に気まずそうにツバキが答えた。

『あ、あははは。これは私が言っていなかったのもありますが、実は、私の両親が死んだ日が……クリスマスだったのです。ですので、クリスマススイブとクリスマスはこの2日間だけは、仕事もゲームも何もかも忘れて、唯一の血の繋がった家族である2人の兄と7人の姉妹達と、家で大人しく仲良く過ごすのが日課になってまして……本当にすみません』

そんな、突然すぎる重いカミングアウトにモモンガは自分の中で少し前の自分に怒りをぶつけたくなった。

『す、すみません。なんにも知らないでそんな事を言ってしまった……本当にすみませんでした!』

モモンガも、思わずメッセージを忘れて声を出し、土下座しそうになるが、なんとか内で抑えて、心の中で土下座をしながら無茶苦茶

謝った。

『いや、いいんですよ。そもそもギルドメンバー全員には、何も言わなかった私が悪いんですから……そう。私が悪いんです……』

「どんどんと暗くなっていくイズナにモモンガはそつと目を逸らした。何故なら、自分たちのギルド、アインズ・ウール・ゴウンの中でも最年少でなおかつ、見た目によらず豆腐メンタルなのだ。誰よりも自分のキャラクター愛も強いが、本当に豆腐メンタルなので、実際にモモンガが一番心配しているのがソレだったりする。」

モモンガは、帰ったらメイドや階層守護者たち、それにイズナと一番関わり深いペロロンチーノとぶくぶく茶釜も合わせて、イズナの帰還パーティーでもして元氣を取り戻させてもらおう……そう思うのだった。

「さて、準備はできたか？二人とも」

モモンガはいったん頭の中を整理し、なんとか精神作用無効が発動する前に気持ちを落ち着かせた。

「はい。いつでもいけますわ。モモンガ様」

「アルベドと同じく、私もいつでもいいぞ。モモンガさん」

「そうか、ならそろそろ村人達の前に、姿を表せるとしよう」

モモンガはデス・ナイトが兵士達3人ほど残した所で、人間達が気づく所まで降りていくのだった。

「……ってちよつと待って!! え？俺ってこのまま？ このま

ま木に逆さまに吊るされたままなの!! ちよ! イズナちゃん!

アインズさん! このヒモ解いてくれ! そして無視をしないでくれー!!」

……と、ペロロンチーノの叫び声に足を止める3人。

そう、ペロロンチーノはイズナに吹き飛ばされたあと、吹き飛ばした張本人であるイズナに回収された後は縄でグルグル巻にされ、大きな木の枝に逆さに吊るされ放置されていたのだ。

そんなペロロンチーノへ顔を向けて、嘆息しながら近づいていくイズナ。

「それは悪かったです、ええ。……ですが、そもそも貴方が悪いんで

しように。初対面でいきなり変態発言したんですから。」

「い、いや、幼女が目の前にいたんで思わず……」

腕も縛られてる為使えないが、えへへと照れくさく頭をかいてるような表情をしていた。

そんなペロロンチーノをジト目で見ながらも、口を開くイズナ。

「……それで、あなたから見た本当の感想は？」

「姉妹の聖水の香りは素晴らしかったです」

キリツとドヤ顔で言うペロロンチーノ。

そんなペロロンチーノを見たイズナは、一つ嘆息して……

チャキンツ！

「——やはりここですり抜けますか」

「ちよ!? ままままままままで?! それは、それは洒落にならない! 全然洒落にならないよイズナちゃん!」

とても冷めた目をしながらペロロンチーノへ愛槍を向けるイズナ。そんなイズナを見て危機を感じたペロロンチーノは身体を必死に動かし慌てふためく。

「ちよつ!? イズナさん! 殺すのだけは……ほんとそれだけは辞めてあげてください! ペロロンチーノさんも謝ってますから!」

ヤバイと思ったモモンガはイズナに近づきペロロンチーノを助けるように庇うが……

「大丈夫ですよ、モモンガさん。殺しはしません。とても……そう、とてもなく残念ですが、これでも大切な幼馴染みの1人なので。——

ただ、男の”アソコ”を切り落とすだけなのです」

——ニコっ

そんな言葉を笑顔で言いきるイズナ。笑顔といっても、口は笑っているが目が笑っていない笑顔だ。

そんな笑顔を見て戦慄する2人。モモンガはすぐに意識を回復させ慌ててイズナを羽交い締めした。

「いやー、ほんとに落ち着けイズナ! 流石にそれはやばい、うん、本当にヤバイから!」

「うんうん!? ほんと冗談ですからそれだけは!」

モモンガとペロロンチーノの必死な態度にイズナは諦め、1つ嘆息しながら2人を交互に見た。

「……わかりました。今回は、特別に、赦しましょう。ですが、次はありませんか？ いいですか？ ペロロンチーノ」

「はい！」

「ちなみにモモンガさんですから。ペロロンチーノ——いえ、この変態を庇ったんです……いいですよ？」

「は、はいいい!?!」

「うん、よろしい。いい返事です。約束を破らないことを祈ります。

——さあ、行きましようか。村へ」

「は、はい……」

生き生きとした表情で前を進むイズナ。そんなイズナに疲れきった顔をして付いて行くモモンガとペロロンチーノの2人。そしてその後ろを何事も無かったかのように振る舞い黙ってついて行くアルベド。

そんな力オスな雰囲気の中3人はデスナイトがいるであろう村へとすすむのであった。

8話

さて、そろそろ敵さんも殆どいなくなりましたし出てもいいじゃないですか？

「モモンガさん……そろそろ」

「ああ、わかっている」

魔王ロールに変わったモモンガさん。その声を聴いたペロロンチーノの雰囲気も変わる。

そこで、更に魔王ロールをするため、私達は転移（テレポート）で空に飛び、ちようど村の中心部に位置するあたりで浮遊する。

「そこまでだ、死の騎士（デス・ナイト）」

モモンガさんが先に地に降り立ち、続くように私達が降り立った。

「はじめまして、私はアインズ・ウール・ゴウン。しがいない魔法詠唱者（マジックキャスター）だ」

モモンガさんはそう自己紹介したあと、残った兵士を見て叫ぶ。

「諸君の上司、飼い主に伝えろ。騒ぎを起こすなら、貴様らの国まで死を告げに行くと。行け!!そして我が名を伝えよ!!」

そうモモンガさんが言うのと騎士たちは走って逃げていった。すると村人が近づき、その中から村長らしき人が近寄って来て、モモンガさん——改めアインズさんにお礼を言っていた。

そんな人達の様子を見ながら私はアルベドと話をしていた。

「ねえ、アルベド。一つ質問してもいいかい？」

「はい、なんでございましょうか。イズナ様」

私はアルベドに聞きたい事を質問した。

「……アルベド、人間は嫌い？」

私の問いに対し、アルベドは普段の声とは比べ物にならないくらい低く吐き捨てるような声で応える。

「脆弱な生き物。下等生物。虫のように踏みつぶしたらどれほど綺麗になることでしょうか。私にとって人間という生物は所詮その程度です」

「……」

私はアルベドの言葉にやっぱりと思ってしまう。私だって、人間と言うものはそれ程好きじゃない。むしろ嫌いと言つてもいい。ユグドラシルというゲームでは、異形種のプレイヤーは狩られる側の存在として扱い、あたかも自分たちは正義だといわんばかりに徹底的に排除しようとしてくる。それはリアルでも同じ。自分の嫌いな者がいれば、1人ではなく同じ思いの者達と一緒に集団でその嫌いな者を屠ろうとするのだ。

よく人は自分たちの以外の動物や生き物を、化け物や危険生物などと言い忌み嫌うが、私にとってはこの世で一番の化け物は“人間”だと思う。人間が化け物と危険視している生物達にとつても、人間はそう認識されているだろう。

そもそも、私達のリアル。そのリアルで住んでいる地球があんなにも汚染された根本的な原因こそ“人間”なのだから。恐らく、いや絶対に人間という生物がこの世に生まれなければ、地球は汚されなくてすんだかもしれない。人間以外の生物が絶滅しなかつたのかもしれない。

全てが人間のせいとは言わないが、それでも地球がこうなつてしまった原因は人間にあると私は思っている。

……ましてや、今の私は本物の異形種——所謂、人間で言う“化け物”になつてしまつているせいか、よけいに強くそう思つてしまうのだ。

「……ですが」

「ん？」

アルベドの話が終わつたと思いつつも一人思考に潜っていると、アルベドが口を開いた。……次は何を話すつもりなのだろうか？

「私は同時にイズナ様を通して人間を見てきました。イズナ様は人間を“嫌いだ”“醜い生き物だ”などと言いつつも、それでも尚、人間の中にはまともな生物はいると話してくれました。特に、“子供”という人間は『アルベド。人間は確かに醜くてとても邪悪でどうしようもない生き物だけど、その中でも子供だけは純粹でとても綺麗なんだ。

子供が汚く染まるのは、まわりにそんな汚い大人と汚い環境があるからそうなってしまう。私は、そんな穢れた人間達から罪のない子供だけは守りたいと……いつもそう思ってる。本当は世界中の子供達を助けてあげたいけれどそれは無理。いまの世の中（世界）では、そんな事は不可能に近いから……。

なら、せめてもの、私は自分の孤児院の子達だけは守ってあげたい。……これからも、ずっと』——そう、私に会う度にお話してくれました。

……人間は確かに嫌いです。脆弱な生き物、下等生物……それはいまもこれからも変わらないでしょう。——しかし、イズナ様の信じる”純粋な子供達”だけは、信じてみようと思います。……だって、私の親友『八雲・N・イズナ』が信じているんだもの」

そう言ったアルベドの顔はとても綺麗だった。……ふふ、アルベド。あなた達は私の事を『慈愛の聖母』なんて言っていますが、貴女のいまの顔は充分、”聖母”に相応しいですよ。

……まあ、こんな事をアルベドに言ったら怒っちゃいますから言いませんがね。

「ありがとう、アルベド。貴女の気持ち、しかと受け取ったわ。流石、私の親友ね。私と同じ思いでとつても嬉しいわ。これからも、よろしくね？ アルベド」

「ええ、こちらこそ」

そうして、私とアルベドは握手をする。……また、硬い絆で結ばれた。そんな気がした。

「……つと。こんな事をしている場合じゃありませんでした。こちらに何か大軍が近づいているのをアインズさんに知らせなくては。……知らせるにしても、気配だけではしつかりとはわかりませんね。よし、ここは空を飛べて、職業柄で遠くまで見えるペロロンチーノさんをお願いしましょうか。……ん？あれ？ ペロロンチーノさん？」

私はペロロンチーノさんに空から確認してもらおうと後ろを向くと、そこにいたはずの人影が無かった。……はて、何処に行ったので

しょうか

「イズナ様。ペロロンチーノ様なら先程、『——はっ!? 美少女の匂いがする! これは至急行かなくては!』と言って何処かに行かれましたが……イズナ様?」

「……………あのやろお…早速、言ったそばからあ…」プルプル
私はアルベドの報告に、頭に血管を浮かばせながら怒りで身体を震わせていた。

全く、言ったそばから約束を破りやがって……………やはり、ペロロンチーノ…殺すか

「……………いいえ。駄目ですよ。ペロロンチーノはアレでも私の友達、いえ、もはや家族の1人とも言うべき幼馴染みです。ここでペロロンチーノを殺してしまつては、私も悲しいし、何より実の姉であるぶくぶく茶釜さんが悲しんでいます……………悲しみますよね? あの人……………まあ、いいでしょう。とりあえず、殺しはしません。ええ。——その代わりお仕置きは確定ですが」

私は1度頭を降つて気持ちを落ち着かせる。自分に確認する様に独り言を言いながら気持ちを整理する。……………途中、姉弟仲に不安を感じながらも、きつと姉らしくするだろうと暫定し、今後のペロロンチーノのお仕置きをどんなにするか考えたが、すぐにいまの状況を思い出し一旦、取り敢えず保留にしまの状況を考える事にした。

「それよりも、また厄介事が増えましたね……………。はてさて、これからどうしたものか」

私はそう呟きながら、その”何者”か達が来ている方向へと視線を向けていたのだった。

9話

……さて。あれから私はこちらへ向かってくる人物を、アインズさんに報告しました。すると、アインズさんはこの村にくる人物を知っていました。何故かと聞くと、村人の村長さんが教えてきたそうです。そんな理由で私とアインズさん。あと先程まで幼女をお持ち帰りしようとしていたアホ鳥一匹を捕獲し、その”お客さん”を待っています。

すると、村に白い鎧を付けた騎士たちがやって来ました。

「……アインズさん。なんだか彼ら、みんな各装備がバラバラですね。さつき殺した騎士たちとは違う感じです。」

「……そうだな。武装に統一性が無く、各自なりのアレンジを施している……。正規軍じゃないのか？」

騎兵たちを観察していた私達は彼らの装備に違和感を覚えた。

なぜなら、先ほどの帝国の騎士達は、それぞれの鎧に紋章を入れており、その鎧も完全に統一された重装備であった。しかし、それに対して今度来た騎兵たちは、確かに鎧を来てはいるが、各自使いやすいように何らかのアレンジが施されている。

……これを見る限り、パツと見れば先ほどの帝国の騎士ではなさそうに見えるが、所詮は見た目だけ。身に付ける鎧なんて変えればバレイし、そもそも先程まで帝国の兵士が暴れ惨敗したのに、またノコノコと同じ格好では奇襲をする前に殲滅させられる。ましてやまだ日も出ているし、そんな所に来るはずもない。だが、鎧を変えれば見ただけではわからないし、堂々と奇襲もできる。

……そうならなければいいのですが。はたして吉と出るか凶と出るか……。運次第ですかね？

そんなことを考えていると、騎士の中で一番ガタイが大きい人が馬から降りてこちらに挨拶をしてくる。

「私はリ・エステイ・ゼ王国、王国戦士長ガゼフ・ストロノーフだ、この近隣を荒らし回っている帝国の騎士達を討伐するために王のご命令を受け、村々を回っているものである」

「王国戦士長……」

そう村長が呟き、私は彼が誰なのか聞いてみると

「商人達の話では、かつて王国の御前試合で優勝を果たした人物で、王直属の精鋭騎士達を指揮する方だとか。私も噂話でしか聞いたことがないですが……」

そうこう話していると

「この村の村長だな？横にいるのは一体誰なのか教えてもらいたい」「それには及びません。どうも、王国戦士長さん。私の名はアインズ・ウール・ゴウン、魔法詠唱者（マジック・キャスター）です。そして私の隣にいるのが友人のイズナ。その後ろにいる者たちは私の部下と、あとそこで縄で締め上げられている鳥人間は一応私の友人です。使い魔でもありますが」

アインズさんは、まず自己紹介を次に私とアルベドを紹介し、縄（鎖）で簀巻きにされているペロロンチーノは適当に紹介する。

紹介が終わると、戦士長は頭を下げながら

「この村を救っていただき、感謝の言葉も無い」

私はその姿を見ておもわず感心してしまった。見た目は一匹だけ化け物だが、それでもおかしな姿の怪しさ満点の人達の集まりのような者たちに見下しもせず、対等の立場として見られている。この男はいいやつなんだなと直感的に感じていたのだ。

その後、アインズさんの仮面を外して欲しいと頼まれたが、魔法詠唱者（マジック・キャスター）としての効力が弱まり、死の騎士が暴れだすかもしれないから無理だと適当な理由を言っていた。

しばらくアインズさんとガゼフさんが会話していると、ガゼフさんの騎士の一人が焦ったように

「戦士長！周囲に複数の人影。村を囲むような形で接近しつつあります！」

私たちは村長の家に隠れて様子を窺っていた。彼らの周囲に浮いているのはどうやら天使のようだ。

「なるほど……確かにいるな」

「あの鎧、それに天使を使役している所を見ると、奴らは恐らくスレイン王国。それもあれだけの魔法詠唱者（マジック・キヤスター）を揃えられるところをみるとあれは特殊工作部隊群。おそらく六色聖典かと……」

「その六色聖典とは？」

「スレイン王国が誇る最強の戦闘集団のことだ……目の前にいる部隊はその一つだ」

ふーん、最強の戦闘集団ねえ。でも、あの天使共はユグドラシルにもいた「炎の上位天使（アークエンジェル・フレイム）」なるほどなるほど……これは、この世界に私たち以外のプレイヤーがいる可能性がありますね。

「彼等は何者で狙いは一体、何処にあるのでしょうか？ 私はこの村にそこまでの価値があるとは思えません」

「ゴウン殿に心当たりが無いとすれば狙いは……一つしか思い浮かばないな」

「成程……どうやら、あなたは憎まれている様だな」

「本当に困ったものだ。スレイン王国にまで狙われるとはな」

戦士長の地位は恨まれ役、ですか。だとしても一人相手あの人数……よほど戦士長が嫌いなのですな。

——それよりも

「アインズさん、あの天使たち、ユグドラシルにもいましたよね」

「ええ。確かに『炎の上位天使（アークエンジェル・フレイム）』に酷似していますね」

「もしアレが『炎の上位天使（アークエンジェル・フレイム）』だとしたらきつと私たちの他にも……」

「可能性はありますね」

アインズと私の会話に、戦士長は割って入り

「ゴウン殿、イズナ殿。我々に雇われないか？ 報酬は約束された額を用意しよう」

戦士長は提案をした。ですが……

「断らせていただきます」

「アインズさんが言うなら、申し訳ありませんが私も」

「そうか……ではゴウン殿、イズナ殿、お元気で。この村を救ってくれた事を感謝する！」

最後にこの村だけは守っていただきたいと言われ、守ることを約束した。

そして戦士長が満足な顔をしてこの村を出ようと扉に向かったところでアインズさんが呼び止め

「……戦士長殿、その前にこれをお持ちください」

アインズさんが戦士長に渡したアイテムって確か……ああ、なるほど。そういう事ですか

ガゼフさんはそれを受け取り騎士たちを連れ村を出た。

「……行きましたね。で、アインズさん、これから私たちはどうしますか？」

「そうですね。では、私たちはここで時が来るのを待つとしようか」

「やっぱりそういうことですか。結構、粋なことをしますね……まあ、それがアインズさんらしいですが」

「ふっ、そうか？」

モモンガ、アルフ、ペロロンチーノは、遠隔視の鏡でガゼフ達と敵の戦いを覗いていた。

戦いは一方的であり、ガゼフ達には勝ち目がないように見て取れる。

そんな中、ガゼフの戦いは凄まじかった。ユグドラシルにはなかった技を使い、六体の天使を一振りで両断し、続く攻撃で一体、二体と倒していく。

だがしかし、天使は次々と召喚され、ガゼフの体力を減らしていく。

そして、とうとう王国最強の騎士、ガゼフ・ストロノーフは今、絶体絶命にたたされた。

逃がしたと思っていた仲間は、ガゼフと戦うといい戻ってきたが、天使たちの攻撃で瀕死、ガゼフ自体も奮闘したが体力は限界を迎え、1体の天使に横腹を貫かれとうとう倒れてしまった。

だが——
「うおおおおおおおおお!!!」

ガゼフは瀕死の重症を負いながらも、血まみれの体を起こし、その足で立ち上がり大声で叫ぶ。

「俺は王国戦士長。この国を愛し、守護する者…王国を汚す貴様らに、負けるわけにいくかあああ!!」

ガゼフはボロボロになった剣を握りしめ相手を睨む。

「ハハッ、そんな夢物語を語るからこそお前はここで死ぬのだ。お前を殺したあとは村人も殺す。ガゼフ・ストロノーフ、その体で何ができる。無駄な足掻きをやめ、そこでおとなしく横になれ。せめてもの情けに苦痛なく殺してやる」

「フツ……クツ……ククク……」

「何が可笑しい。とうとう痛みと絶望でおかしくなったか？ 王国戦士長」

「…お前達は分かっている。あの村には俺よりも強い御仁達が居る。……お前達は俺には勝っても、あの人達に破れ、絶対に勝てない……ッ！」

「ハツタリか？ まったく、瀕死の体で減らず口を……まあ良い。貴様もあの村もどうせ消えるのだ。——天使たちよ、ストロノーフを殺せ！」

「ぐっ！」

そして陽光聖典の指揮官ニグン・グリッド・ルーインは部下に指示を下し、天使たちをガゼフに仕向けた。ガゼフが歯を食いしばり折れそうなほどひび割れ傷んだ大剣を握りしめ、その時——

ガゼフの姿が消え、代わりに見たこともない格好をした仮面をかぶった者と、全身を見たことも無い、顔が露出した白い鎧を身に纏った少女と、その少女とは正反対の黒色の顔まで隠す全身鎧（プレート

アーマー)を着用した、女性と思われしもの。そして明らかに人間ではない化け物の姿をしたものがそこにいた。

「な、何者だ!? 貴様ら!」

ニグンが叫ぶと……

「はじめましてスレイン法国の皆さん。私の名前はアインズ・ウール・ゴウン。親しみを込めて、アインズ、と呼んでいたただければ幸いです……そして隣にいるのが我が友人のイズナとペロロンチーノ、後ろにいるのがアルベド。まずは皆さんと取引をしたいことがあるので、すこしばかりお時間をもらえませんか?」

10話

「あの村人とは少々縁がありましたね」

「村人の命乞いでも来たのか？」

バカにしながらかこちらを見下すニグン。

「いえいえ。ですが……お時間をいただけるようでありがたい。さて、まず最初に言っておかないといけないことが一つ。皆さんでは私達には勝てません」

そう言うのと、陽光聖典の者たちは笑い出した。

「無知とは愚かなものだ。我々のことを知って戯言か？それとも我々のことを知った上で気でも狂ったのか？まあ、どちらにせよその愚かさのつけを支払うことになるぞ」

その言葉を聞いてアインズさんは肩をすくめ

「……さて、それはどうでしょう？ 私は全て観察していました。その私がここに来たというのは必勝という確信を得たから。もし皆さんに勝てないようだったら、あの男は見捨てたと思われませんか？」

そして、ひとつ嘆息し

「それに、お前と戦士長の会話をすべて聞いていたが……本当に良い度胸をしている」

そうアインズさんが言った瞬間、周囲の空気が変わった。

「お前たちはこのアインズ・ウール・ゴウンと、そして我がわざわざ手間をかけて救ってやった村人たちを殺すと広言していたな。これほど不快なことがあるものか……！」

ニグンはモモンガのただならぬ殺気を感じ怯えた。

「……ふん。不快とは、大きく出たな魔法詠唱者魔法詠唱者（マジック・キャスター）。で、だからどうした？」

「抵抗することなくその命を差し出せ。そうすれば痛みはない。だが、拒絶するなら、愚劣さの対価として絶望と苦痛の中で死に絶えることとなるだろう！」

その瞬間、陽光聖典の者たちの隙間を縫うように、死を感じさせる風が通り抜けた。

「——天使達を突撃させよ！　こちらに近づけさせな!!」

ニグンはそくぎに天使たちに命令し、命令された2体の天使たちが一斉に剣を向け、突撃してきた。

突撃してきた二体の炎の上位天使（アークエンジェル・フレイム）がその手に持つ炎の剣をアインズに突き立てる。

——ドスドス！

アインズは何もせずに剣に貫かれた。

「無様なものだ。下らんハツタリでこちらを煙に巻こうと……」

だがニグンは何かに気づき再びアインズに視線を送る。

すると、そこでは先ほどの2体の天使が強くジタバタと何かに逃れようともがいている。

二体の天使がゆっくりと左右に別れるように動いた。ただしそれは異様な動き方。誰かに無理やり動かされるように離れていく。——そう、ニグンたちには見えていないでしょうね。

「……言っただろ？　君たちじや私達には勝てないと。人の忠告は素直に受け入れるべきだぞ？」

アインズさんはおかしそうにいいながら、先ほどのニグンが見下しバカにするような声でそう言った。

いまも、アインズさんの伸ばした両手の先にある二体の天使たちは逃れようと必死にもがく。しかし、それぞれの手でアインズは暴れる天使をつかんで離さない。

しかもアインズさんの体には天使が持っていた光の剣が体を貫通したままだ。天使を捕まえているだけではなく、体を貫かれているにもかかわらず、まるで痛みを感じないかのように平然と佇んでいるアインズさんに敵方は畏怖していた。

「バカな……ッ！」

「なにかのトリックに決まっている……ッ！」

敵方さんたちは、驚き戸惑い、いまの状況に混乱していた。

「上位物理無効化　データ量の少ない武器や低位のモンスターの攻撃による負傷を、完全に無効化する常時発動型特殊技術（パッシブスキル）なんだが——はああああ!!」

アインズは両手にそれぞれ掴んでいた天使を、拳ごと地面にすさまじい速さで叩きつけた。ズン、という音とともに大地が振動したと思ってしまうほどの桁の違う力を込めて。

「……やはり、ユグドラシルの炎の上級天使（アークエンジェル・フレイム）と同じということか」

そう言うときアインズさんはゆっくりと立ち上がる。

「さて、お前達がなぜユグドラシルと同じ魔法、同じモンスターを召喚できるのかを知りたかったのだが……まあ、それはひとまず置いとくでしょう」

「(……………えっ！ おいとくの!?)」

私はその言葉に思わず驚く。ふと視界に入ったペロロンチーノを見ると、表情はわからないが羽がバタバタと忙しなく動いているのでこっちも驚き戸惑っているのだろう。

天使を屠ったアインズさんは姿勢を正しながら手をゆっくりと広げる。

「次はこちらの番だ」

気持ち悪い静けさの中、アインズさんの言葉はどこまでも大きく聞こえた。

「いくぞ？ 塵殺だ！」

アインズさんの一言にニグンがすぐさま構える。

「全天使で攻撃を仕掛ける！ 急げ！」

弾かれたように、全ての炎の上位天使（アークエンジェル・フレイム）がアインズさんに迫る。

私たちが構えようとするが

「本当にお遊びが好きなの奴らだ。……皆下がれ」

アインズさんに手で制され、私たちは構えをといた。

天使たちが襲い掛かる中、アインズさんは四方八方から飛び掛かる天使によって一分の隙間もない状況下でありながら、焦りすら感じていないようだった。

……まあ、正直いつて、この程度の天使のランクでは私たちを殺せるなんて笑い話にもなりません。

無数の剣によつて串刺しになる、ニグンたちそう思ったのか顔が”
勝った!”みたいな、勝利を確信した表情になっているがそれより早く
アインズさんの魔法が発動する。

〈負の爆裂（ネガティブバースト）〉

ズンと大気が震えた。

光を反転したような、黒い光の波動がアインズさんを中心に一気に
周辺を飲みつくす。波動が迸った時間はまさに瞬きひとつ。ただ、そ
の結果は歴然として残る。

「……あ、あり……えない……」

誰かの眩きが風に乗って聞こえる。それほど彼らにとつて信じら
れない光景が広がっているようだ。

まあ、それもそうですよね。なんせ、彼らの絶対と信じている総数
四〇体をも超える天使たち。それらが全て、黒の波動にかき消されて
いるのですから。信じられず呆然と立ち尽くすのも頷けますよ。え
え。

「う、うわあああ!」

「なんだ、そりゃ!」

「化け物が!」

天使が意味をなさないと知り、悲鳴のような声を上げながら、自ら
の信じる魔法を立て続けに詠唱し始めた。

「光の光線（ホーリー・レイ）!」「毒（ポイズン）!」「衝撃波（シヨツ
ク・ウェーブ）!」「炎の雨（ファイアー・レイン）!!!」「人間種魅了
（チャーム・パーション）!!」「束縛の鎖（ホールド・チェイン）!」

その他幾つもの魔法がアインズに打ち付けられる。

——が

多数の魔法を直撃しているが、すべて無効化されているためダメー
ジはなくアインズさんはビクともしない。

「……ねえ、ペロロンチーノ」

「何だい、イズナさんや」

「これ、私達来た意味有るのかな……」

今日の前で起きている光景、敵が必死に魔法を打っているがアイン

ズさんは立っただけだ。

「……うん！——うん！来る意味なかったね！でも、俺は幼女と戯れ、更に幼女の聖水を臭えただけでとても満足です」

「……アア、ソウデスカ……」

私は最後の言葉にもう何も感じず、ただただ無心で答えた。

そう会話している間も戦闘は続いている。

「ふむ……やはりユグドラシルの魔法ばかりだ」

そして、最後の魔法があたりアインズさんは黒煙に包まれ。

「誰が——その魔法を教えた!!」

「ひい!？」

アインズさんは物凄い気迫でそう言うと、その気迫と声にビビった1人が情けない声を出して鉄のスリングを放とうと構え、それを放つたが——

——ヒュンツ!……ブシャアアア

「え?」

その者の首から上が無くなった。一瞬の出来事に、隣にいた1人の男が『え?』……と、声を出す。

「何が……起こった……?」

ニグンも突然の事に状況が追いつけず、困惑していた。

——ニグンたちは見えていなかった。だが、私たちは見えていた。アルベドがアインズさんに鉄のスリングが当たる直前に、アインズさんの前に出て放った本人へと跳ね返したからだ。

「アルベド……私達があの程度の飛び道具で傷つく事は無い事は承知している筈だ。わざわざお前が……」

「——お待ちください、アインズ様。至高の御身と戦うのであれば、”最低限度”の攻撃等言うものがございます。あのような飛礫など……失礼にもほどと言うものがございます」

アルベドは”最低限度”というところを強調しながらそう言った。すると、その言葉にアインズさんは笑い出す。

「ふはは！それを言ったらあいつら全員失格じゃないか？なあ、我が友たちよ」

すると、アインズさんが私とペロロンチーノの方を向きながらそう
言ってきた。

「……ふむ。まあ、そうですね。確かにアルベドの言う通りだ。最低
でも私たちの自動無効化の防御を突破できる、つまり私たちの体に傷
が付けれ程度にまで力がないと、それを受ける気にもなりません。

そして、アインズさんの言う通り、彼らの存在意義がなくなりま
すよね」

「ははは！確かにそうだな！俺だってそう思うぜ、イズナちゃん！
モモンガさん！」

「ペロロンチーノ。こんなギルメン以外の人達が多数いるところで語
尾に”ちゃん”をつけるな！いつも言っているだろう！何度言え
ばわかるのだ！あと、いまのギルド長は、”モモンガ”ではなく”
アインズ”だ。それも覚えておけ」

「はいはい、わかってますよ」

「その返事はわかっていないだろう!?……はあ、まったく。これだか
らペロロンチーノは……もう」

私は思わず嘆息してしまった。

「——なあっ！監視の権天使（プリンシパリティ・オブザベイショ
ン）かかれ！」

ニグンが監視の権天使（プリンシパリティ・オブザベイション）に
命令し、アインズさんにけしかける。

監視の権天使（プリンシパリティ・オブザベイション）は、何も持つ
ていなかった右手にハンマーの様な武器を持って、アインズさんに振
りかぶるがアインズさんは難なくそれを受け止める。

「やれやれ……反撃と行こうか。〈獄炎（ヘルフレイム）〉」

アインズさんの伸ばした右手の指先から放たれた、ポツンとかすか
に揺らめく指先程のとても小さな黒い炎。吹けば消えるようなその
黒い炎が監視の権天使（プリンシパリティ・オブザベイション）の体
に付着する。

ゴウツ、と監視の権天使の全身を黒い炎が一瞬で覆い尽くした。

物凄い勢いで、一瞬で燃え上がる黒炎の中、監視の権天使（プリン

シパリテイ・オブザベイション)の姿が溶けるように一瞬で掻き消えた。——そう。とても余りにも呆気なく。そして同時に炎も消える。そこには……何も残っていないかった。いままでの光景 天使がいたのも黒い炎が起こったのも嘘であったかのように。

「ば、ばかな」

「一撃……だと……」

あまりにも衝撃の出来事にザワザワと騒ぐ仮面の人達。

「——ありえるかあああ！ 上位天使がたった一つの魔法で滅ぼされるはずがない！」

無数の混乱が生じる中を、ニグンの怒鳴り声が響く。

「ニグン隊長！ 我々はどうすれば……ッ！」

ニグンに縋るように脅えながらそう訴える人。すると、ニグンは『はっ！』と、何かを思い出し、クククと気持ち悪い笑みを浮かべながら懐に手を入れゴソゴソと何かを探して、見つかったのか”それ”を天に掲げながら嬉々として叫ぶ。

「お前達！ 最高位天使を召喚する!!」

『お、おとお！』

「——む？ あれは……『魔封じの水晶』ではないですか。それにあの輝き……ふむ。なるほどなるほど。あれが彼らの最後の切り札といったところですか」

「……あれは魔封じの水晶か？」

アインズさんがこちらを見ながら聞いてくる。

「……そう見えますね。それにしても最高位天使と言いましたね」
ペロロンチーノがそれに答える。

「それにあの輝きは超位魔法以外を封じるものだ……」

「ええ、その様ですね」

アインズさんもペロロンチーノも気づいたのか話をしていた。

「アインズさん、ここは私がやりましょう」

そんな2人を見ながらも、私は1歩前に出てそう言った。

「待つんだ、もしも熾天使級（セラフクラス）だったら……」

「なに、いまの私なら大丈夫ですよ。仮に”熾天使”クラスが出てき

たところで私の固有スキル『光・闇の攻撃完全無効化』がある限り、私を倒すことなどできません。……それに、私には“アレ”があるんですよ？ つまり、眼には眼を歯には歯を——”天使”には“天使”を……ね？”

「そうですね。ここはイズナちゃんに任せましょう。ましてや天使が相手ですよ？ あの”天使”という種族相手ならイズナちゃんに右に出る者は、ギルメンどころかユグドラシル内にいませんって。だから、アインズさんと俺はおとなしく待機しときましょうよ。イズナちゃんなら大丈夫ですって！」

「……すみません。なら、あとは任せてもよろしいですか？」

「ふふ。いいんですよ、これくらい。——アルベド、アインズさんにスキルを使用して守ってください。……あ、ペロンチーノはいいです。どうせ避けますし。仮に当たっても天使なのでついでにそのどうしようもない煩惱も消してくれるでしょうから」

「はい！ 了解いたしました」

アルベドはアインズの前に出ていつでもスキルを使える状態にした。

「え!? 俺の扱い酷くない!？」

——さて、何か聞こえるが無視をしよう。……本当に熾天使級（セラフクラス）だったら、いくら無効化があるとしてもあくまでも”光と闇”だけ。熾天使級ともなると、ももとのステータスが馬鹿げたほど高いから少しやっかい。……まあ、だとしても熾天使級なら問題はない。まあ、でも、すこしばかり本気を出してみるのも、たまにはいいかな？

そしてニグンが歓喜の声を上げる。伝え聞く伝説の降臨の前に。

「見るが良い!! 最高位天使の尊き姿を！」

おっと。とうとう来るか……ッ!!

そして、ニグンが持っている結晶が光り輝き——

「いでよ！ 威光の主天使（ドミニオン・オーソリテイ）!!」

「……………ん？」

「……………え？ 威光の主天使（ドミニオン・オーソリテイ）？」

私は思わず耳を疑った。さつき最高位天使って言いましたよね？
え？聞き間違いだったかな？

だが目の前にはどや顔してるニグンの姿と、威光の主天使（ドミニオン・オーソリテイ）がいた。…………どうやら私の耳は正常のようだった。

「なんてこと…………」

「そうだ！怯えるのも仕方ないが、これこそ最高位天使——」

「…………警戒して損した」

「ですね…………」

「右に同じく…………」

私の発言にアインズさんもペロロンチーノも嘆息しながらそう言った。

「な…………なんだと？」

ニグンは今の発言信じられないような顔でいた。

「この程度の幼稚なお遊びに警戒していたとは…………」

アインズさんが落胆しながら言う。まったくその通りです。

「本当ですよ…………すみません、アルベド。せっかくスキルまで使ってもらって…………」

「とんでもありません。想定以上の何者かが召喚される可能性を考えれば、御身を傷つける可能性はできる限り低くするべきです」

「…………そう言ってもらえると助かります」

ニグンは信じられない面持ちでいた。最高位天使を前にしてなぜそんな平気でいるのかわからないようだ。だが、それでも強がるのかまたニヤけた顔でこちらを見てきた。

「アインズ・ウール・ゴウンの部下であるその白い鎧の小娘を消し飛

ばす、そのあとは貴様の番だ！」

ニグンは挑発するように、私の後ろに下がったアインズさんを指差し、そう宣言した。

「はあ……まったく。熾天使が出ると身構えてたのに、こんな雑魚が出てくるとは……はあ、なんて私はバカなのでしようか」

「——ぎ、雑魚だとお！……どういう意味だ！小娘!!」

ニグンが驚愕の表情で私を見つめてくる。

「どういう意味も何も……そのままの意味ですがなにか？」

私は思わず首を傾げながらそうたずねる。

「最高位天使のを前に、何故そんな態度ができる！」

「ああ、そういう事ですか。そんなもの簡単な話ですよ。——この私を天使で相手にするのなら最低でも最高位天使である”熾天使（セラフ）”を五体ほど呼びなさい。……まあ、それでも熾天使級（セラフクラス）程度の力では何体来ようとも私に大きな傷を負わせることは出来ませんがね。」

私は心底呆れながら、バカにするようにニグンにいった

「いや！　ありえん！　ありえん！　最高位天使に勝てる存在がいるはずがない！　魔神にすら勝利した存在だぞ！　はったりだ！　はったりでしかない！」

「そんなこと知りませんよ。実際に私には効きませんし。……なら、試してみますか？」

私は右手を出して手のひらを上にし、チヨイチヨイと揺らすように挑発した。

「——ッ!?　ならばお望み通り消し去ってくれろ！　《聖なる極撃（ホーリースマイト）》を放て！」

ニグンがそう命令すると威光の主天使（ドミニオン・オーソリテイ）は魔法を使用した。

「人間では決して到達し得ない極限級の領域、第七位階魔法。魔神すら消滅される神のみわざをくらうがいいいい!!」

そして魔法の発動され、そして光の柱が落ちてきた。私はその光の柱に包まれた。

「今度こそやったか!？」

ニグンの嬉々した声が聴こえてくる。私はいまだ光の中だが、徐々に視界が元に戻ってきた。

「アインズさんたちやニグンの姿が見えると、アインズさんが私によつてきた」

「……一応聞きますがダメージ入りますか？」

「もちろんノーダメージですよ。強いて言うなら、ただまぶしいだけですわね」

「ですよね〜…」

さくすと、せつかくだし、こんな茶番をさせたやつに、天使の上——否、熾天使の上の存在。私の創り出した最強の天使を見せてあげようかな？

そう考えているとアルベドが

「か、か、下等生物がああああ!!!」

「ア、アルベド?」

「至高の御身に——何より私の大切な、大好きな親友を傷物にするなんて——なんてことをおおお!!!ゴミである身の程を知れええええ!!!」

「お、落ち着け!落ち着くのだアルベド!」

「そ、そうですよ!落ち着いてくださいアルベド!あと、傷物になんてなっていないません!?!」

「しかし、アインズ様、イズナ様……ッ!!」

「いいんですよ、あの程度ではダメージ入っていませんし……と言うよりも、あの程度の攻撃で一々ダメージをくらっていたら私は今頃何千回と死んでいますしね」

「そうだぞ、アルベド。お前は外に出ていないから知らなかったかもしれないが、我らアインズ・ウール・ゴウンの中——いや、ユグドラシルの中で、天使を狩るのにイズナの右に出る者はいないからな。伊達に『天神の九尾』なんて言われてはいない、」

「…わかりました。それにしても流石はイズナ様。敬服いたしました」

「いやいや、私の身を憂慮してのお前の怒りは嬉しいよ。ただ……アルベド、あなたは微笑を絶やさないといいほうが魅力的かな」

「くっふー！みりよ、魅力的！——ゴホン。ありがとうございます、イズナ様。……ですが、イズナ様も私なんかよりも、ずっとお美しく魅力的ですよ」

「あら、アルベド。ありがとうございます」

——さあ、お話はここまで。

「さて、お待たせして申し訳ない」

「大丈夫ですよ。さあ、さっさと片付けますか」

そして私は彼らに振り向いた。

「さて、この際せっつかくなんであなただに特別に見せて上げましょう。威光の主天使（ドミニオン・オーソリテイ）の上の上である至高天の熾天使（セラフ・ジ・エンピリアン）……そして、その更に上の存在である、”セファイラーの十天使”——それと同格の存在とも言われる伝説級の超天使、『災厄の五大天使』を!!」

そして私は、一つの宝玉を取り出した。

「——さあ、時は来たれり！ 災厄にして災害、世界に終末をもたらす最凶の天使よ。我が創りし最高にして最強の天使よ！我の忠実な下僕よ!!——いでよ…… 『災厄の五大天使』セラフイモン!!」

ゴゴゴゴゴゴゴ——ツ!!!

宝玉から放たれる凄まじい光と共に、地を割るような音が響く。

「アルベド……よく見ておけ。アレこそが、お前の親友にて『天神の九尾』と言われ恐れられた彼女の創り出す、『災厄の五大天使』だ」

アインズさんの声と同時に、空間が歪みそこから何かが出てきた。

その姿は人のようであるが、背丈は五メートル程あり、その背には金色に輝く五対十枚の翼、身に付けている鎧は青と白銀色に分かれ、全身に神々しいほどの白の淡い光をともしている。

至高天の熾天使（セラフ・ジ・エンピリアン）。

天使の中でも最高位に位置する熾天使（セラフ）級の一種。アインズさんですら全力を出したとしても相性的に勝ち目は薄く、アルベド共に全力で相手をする必要がある強さ。

そして、セファイラーの十天使。至高天の熾天使（セラフ・ジ・エンピリアン）を超える天使で、天使級では最強種。なぜなら、ワールドエネミーの一種だから。

つまり、セファイラーの十天使と同格とされている私の召喚したこの子『災厄の5大天使』は少なくとも強さはワールドエネミークラス。なぜそんな天使を持っているのかは、いまは話せないが、深いわけがあるだけ伝えておく。

そんな、ユグドラシルでの最高位天使の一角、敵はその神々しい姿を呆然と見つめていた。

「——さあ、わが最高の天使よ。そこの愚かな人間共に真の最高位天使の力を魅せるがよい」

そして召喚された熾天使が動き出す。

『セブンヘブンズ』

セラファイモンが七つの光を槍のように威光の主天使（ドミニオン・オーソリテイ）に向かわせ、抵抗も無く胴を七つの光に貫かれ、光の粒子となつて崩壊していく。

主天使が完全に消滅し、辺りは静寂に包まれている。

その場にはセラファイモンと、ただ呆然と立ち尽くす敵の姿があった。

「……バカな……こんなの……ありえるはずがない！……お前たちは……いったい何者なのだ……」

そんな中ニグンは声を発したが、その声は震えていた。

そう言つて、全ては光に包まれた。

11話

……さて。あれから私とアインズさん、そしてペロロンチーノとアルベドの4人は帰ってきた。帰ってくる前に、アインズさんが、詳しくこの世界の情報をニグンたち陽光聖典から聞かためのために、彼らをナザリックに送り届けた。

そのあと帰ってきた私たち四人はナザリックでの、別行動をとっていただけけれど……

「ちよつとイズナちゃん？ こつちに来てくれるかしら？」

とても怖い雰囲気を出したぶくぶく茶釜さんが目の前にいた。

私は嫌な予感がしたので回れ右をし、そくぎにそこから逃げようとしたが……

「あら、どこに行こうとしているのかな？」

ガシツ！

謎のピンク色の触手にあえなく捕まり、そのまま転移されどこかの部屋に来た。

どうやら、連れてこられた部屋はぶくぶく茶釜さんの自室のようだ。その自室で私ははまだ触手に拘束されていた。

「……で、君は私が言いたいことがわかるかな？」

ぶくぶく茶釜さんが物凄く目に見えてわかるほど怒っている。背後から般若が見えるのではないかと言うほど威圧感があった。

「え、えつと、も、もしかして……モモンガさんの件でございませうか？ 勝手にギルド名を自分の名前として名乗ったことを……」

「あら、わかってているじゃない。少し前に来たモモンガさんと愚弟の2人はなんの事だか私が言うまでわかっていなかったのだから」

そう言ったぶくぶく茶釜さんがこちらに近づいてきた。

「……それで。わかっていながらなぜ君は黙認したのかな？」

「あ、いや、えつと、それはあ……」

「それは？」

「す、すみませんでした！ わかつてはいたのですが、その場の雰囲気にならされてしまいスルーしてしまい、本当に申し訳ございません！」

こういうのはギルドのメンバー全員と話し合って決めることなのに私たち共の独断にて決めてしまい誠にすみませんでした！」

私は拘束がすこし緩くなっていたので脱出しながらも土下座をした。

「ふくん。そう。わかっているのならいいわ。今回は特別に許してあげる……でも」

——ポフンツ！

「……へ？」

突然私の変化が解けて元の姿である、『白面金剛九尾』イズナの姿になっっていた。

——ニユルン

「——ひあ!？」

ニユルニユル——ニユルン！

「あっ……うん——ひゃうー！」

ぶくぶく茶釜さんの触手が突然服のなかに入ってきて、私の体をヌルヌルしたものが動き回る。私は変な感覚におもわず変な声を出してしまう。

「——くっッ!／／／／」

私は自分でもおかしいと思うような声を出してしまったため、思わず口を抑えた。顔がとても熱い。きつと真っ赤になっているのだろう。

「……次、同じような事をやったその時は、私の持てる凌辱系エロゲの知識を総動員して犯し尽くしてあげるから。今以上の快楽が貴女を四六時中襲うわよ？ 向こうの現実世界で男だった貴方が感じられなかった、今みたいなの——いえ、いま以上の快楽をその体に刻んであげるから、覚悟してね？ イ・ズ・ナ・ちゃ・ん？」

「——は、はい。りよ、了解いたしました……ぶくぶく茶釜……様……」

私は小刻みに体を振るわせながら、土下座をしている。顔がまったく挙げられない。いまでも私にとっては充分の刺激だったのに……いま以上の刺激だなんて……耐えられる気がしないよお……絶対に壊れる……。

怖すぎてぶくぶく茶釜さんの顔が見れなかった。

「まあ、充分あなたに恐怖を与えたし、もういいでしょう。次は本当に気をつけてね？ イズナちゃん。わかった？」

ぶくぶく茶釜さんの威圧感が消えて、私の重圧がなくなる。

私が顔を上げると、ぶくぶく茶釜さんが顔と顔が重なるかと思うくらい近くにいた。

「ほら、泣かないの。可愛い顔が台無しじゃない」

「……………だ、だってえ……………グス」

「ほらほら。ごめんなさいね。怖かったね。でもあなたが悪いのよ？ 何度も言うけれど次はちゃんと気をつけなさいよ？ お姉ちゃんと約束できる」

「……………うん。やくそくできる」

「はい。いいいいい」

「~~~~♪」

なんか撫でられるの気持ちいい。自分でもおかしくなっていると思うけれど……………いまはこれでいいや……………ふあ……………ナデナデ気持ちい……………Z z

Z z

あれから数時間後…起きた私は、さっきの自分の行動を思い出し。羞恥心のあまりぶくぶく茶釜さんの部屋のすみで体育座りして顔を隠していた。

「……………鬱だ。死のう」

「あはは！ そんな大げさな。普段はみれないから可愛かったわよ？

イズナちゃん？♪」

「うわああああ!!! わ、忘れてください！ お願いします！ ぶくぶく茶釜様!!」

「いやよ。だって可愛かったもの。(思わず動画や写真も撮っちゃったけれど……………これは内緒にしておきましょうか)」

「そ、そんなあ……………」

「(ああ、うるうるとした瞳で顔を赤くして……………まるで捨てられそう

な子犬みたいな顔して——ああああ!! 可愛いよー! イズナたん可愛いよイズナたん!——ゴホン。そんなに忘れてほしいなら、私の事をこれからお姉ちゃんと言いなさい。そしたら忘れてあげる」

「…………へ?」

「ほらほら、どうしたの? じゃないと、今回のイズナちゃんの姿を言いふらそうかなあ〜」

「それだけは辞めてください!……………わ、わかりました。いいですよ? 言いますからね!」

私はゴクリと唾を飲み込み、決意していった。

「お、お姉…ちゃん? / /」

「……………ごはあツ!」

「えええええええツ!? ど、どうしたんですか!? お姉ちゃん! いきなり血を吐いたりして大丈夫ですか!」

「だ、大丈夫よ…心配しないで、我が妹よ…(や、やばいわ。なんて破壊力よこの娘。瞳うるうる+上目遣い+ほんのりと赤く頬染めなんて、私を萌え死にさせる気なの! ……くっ。どうやら私はとんでもない化け物を生み出してしまったようね)」

……………なんだか、茶釜さんの様子がおかしい気がするのは気のせいだろうか? ……まあ、表情がないので気のせいだろうと信じよう。

「さて、それじゃ私たちはお茶にしようかな。イズナちゃんも一緒にどうぞ」

「…………あ、じゃ〜お言葉に甘えて」

「ふふ。なら決まりね」

そうして、私とぶくぶく茶釜さんの2人で、お茶会を開くのだった。

12話

あれから暇ができた。ぶくぶく茶釜……改めお姉ちゃんとのティータイムが終わった私は暇を持て余している。

そんな暇がある時、ふと思いついたのだ。そう、私はまだ自分の息子、娘達に挨拶が出来ていなかった事を。

「……と、いうわけで私は家にきたのです」

息子、娘達に会っていない事を本当に今更ながら思い出し、こうしてナザリックに作った拠点にきたのだ。

いまいるここは第6階層。そこに私の領域がある。

「さて、みんなは元気かな？」

生い茂る深い樹海を抜けると、そこには大きな屋敷があった。そこには桜の花が舞い落ちて、大きく立派な庭がある。

この名前は無い。ちよつとした和風の屋敷だ。広さはナザリック内でも大きく、どれぐらいかというと、寝殿造り並の広さである。ちなみに寝殿造りとは、日本の平安時代くらいで見られる貴族の家だそう。

「……あら？ あなた達2人が一緒にお茶をしているのは珍しいな。ラヴァ、クレア」

いま、自分の目の前には青髪のポニーテールの着物少女クレアと黒髪ストレートの黒色の着物を着ている少女ラヴァがいた。

「い、イズナ様!! お戻りになられたのですか!？」

「あ、主様！ 主様の目の前でこのようなッ……ご、ご無礼をお許しください！」

縁側でお茶をしていた2人は私の存在に気づいたのか慌てて立ち上がり頭を下げようとしますが私はそれを止めさせる。

「よしなさい。実の娘にその様な接し方をされると気分が悪い。あなた達の普段通り普通にしなさい。命令です」

私は出来るだけ主っぽく、モモンガさん改めアインズさんの魔王ロールっぽくしながら命令する。だって、私が手塩をかけて育ててあげた娘みたいな子にそのような他人事の接し方をされると泣け

る自身があるほどだ。

「は、はい／＼／＼」

「……………な、なぜ顔を赤くして、その様に嬉しそうに？」

「私は他の子達にも挨拶しないといけないから、また今度ゆっくりお話ししようか。それじゃ、またね」

「はい！イズナ様！」

私は2人と別れ家の中を探索していく。中はかなり広いので探すのに手間をとる。基本的にはこの部屋の掃除や片付けは自立起動型お掃除ゴーレムと数人の私お手製のメイドNPCで動かししている。

この屋敷が使われるのは主に侵略者である相手プレイヤーの一時の休憩場所だ。昔のゲームで良くある休んで自動回復なる機能は付いていないが、このナザリック内で唯一無二のセーフゾーンなのである。ちなみにだが、過去にこのナザリックに大規模で侵略行為を行ってきたプレイヤー一同もここで休憩し、戦力を調べていた。

ここは確かにセーフゾーンだ……………帰るまでわね。

そう、ここは来て入るのはいいがこの建物から出ようとするところからゆるトラップと私の生涯(笑)をかけて作ったNPC達が多数存在する。……………と言ってもレベル100のNPCはたったの4体。この館を守る砦でもある。

ちなみに作ったNPCは全部で20体。100越えの4体を除けば16体。メイドタイプがその内5体。残り11体は戦闘型のNPCである。ちなみに先ほど出会ったクレアとラヴァはこの8体のNPCに入っている。

更に付け加えるとみんな異型種だ。誰がどの異形種なのかはまた話そう。

ガキン……………ギャギャギャ……………キイイイン——

この館の中にある道場から音が聞こえる。……………どうやら誰かが戦っているようだ。

中を除くとそこに居たのは……………

「おや。アザミ、それにトウテツも2人で打ち合いですか。感心です

ね、私は嬉しいですよ」

道場にいたのは2本の木刀を持っているショートヘアーの金色の目が特徴の少女アザミと、同じく2本の木刀を持っているザ・侍と言った感じの雰囲気を出している緑色の目が特徴の男性、トウテツがいた。

「主様、帰って来ていたのですね。それならば話をして頂ければ盛大に歓迎したものを」

「そうですね。アザミの言う通りですぞ？ 主様」

2人に怒られてしまった……。そう言う設定に作ったのは私だけれど、なんか、悲しいな。でもまあ、これはこれでいいかな？ ナザリックの階層守護者みたいに主君は神様みたいな扱いもいいけれど、私的にはこっちの主君だけれど絶対視せずちやんと悪いところも見てくれる様な感じの子達のほうが好きなんだよね。性格的にさ。「ごめんなさいね。それよりも、他の子達はどこにいるか知らないかしら？」

私がそう聞くと2人は少し悩み答える。

「ララ様とラーム様はいつもの場所で花に水をやっているのを見ました。エル様とグラデンス様は居間でお茶をしているかと。メルキオ様とゼクト様は『狩り場』に出かけており、ロヌエル様とリリース様、セフィア様が寝ております。」

ララとエルとラームとゼクトの4人が私の作ったNPCの中で階層守護者と同じレベル100のNPCだ。他の子達は90〜80代のレベルだ。ちなみにだがりリスとロヌエルはメイドで、リリースの種族はシズ・デルタと同じ自立人形（オートマトン）と呼ばれる種族で、ロヌエルは大天使と呼ばれる種族で、モモンガさんがまだ単独で勝てる天使である。

それと、メルキオは一応NPC扱いされているが、実はワールドエネミーの1種にして私が創り出した召喚モンスターである、『災厄の五大天使』の1体である。前は同じ『災厄の五大天使』セラフィモンと同系統のモンスターで、NPCと言うよりは使い魔扱いなのである。……だが、この五大天使の中でも特に知識が多くそれ故の戦術も

多いので、こうしてNPC扱いされているのである。ちなみにだが、『災厄の五大天使』はセラフィモンやメルキオを含めみなレベルは100代だ。先もいったがNPCではなく使い魔(モンスター)扱いなため私のNPCのレベル100のメンバーの中には入っていないのです。

メルキオはこの館にいるメンバーの中で唯一無二のモンスターだ。そのためこの館に来たものは、館から出る時にこのワールドエネミーの一種の『セファイラーの十天使』を超える『災厄の五大天使』の1体であるメルキオと戦わなければならぬのだ。一応、逃げれない訳では無いが、逃げたところで私の創りしゴーレム達とそれを指揮する5人のメイドメンバー。

更にそれから逃れても戦闘メインの11人のメンバーが待機し、その後方にはこの館の守護者である4人のレベル100代の子達がスタンバっている。それらを突破して、初めてこの館から出ることが可能なのである。

そうすることで、ナザリックの7階層に侵入する事を困難にすることが出来てきたのだ。

ナザリックの歴史にて最大の侵略行為であった1500人のプレイヤー。実は本当に侵略してきたのは5千近くであり、うちの殆どがこの館の餌食になったのだった。館の餌食のあと、その残りは6階層のコロッセオと8階層にて全滅したのでした。

……あと『狩場』についてはまた後日話そう。ここはいわゆる遊び場所。私の作ったね。

「そう。わかったわ。今日は止めておきましょう。また、次の機会にくるわね。しばらくはナザリックにいるし。……貴方達を放置してしまった私が言っただけじゃないことだけれど、もしものときは力をかしてくれないかしら？」

私が言うと、2人は目を見開いたあと、フルフルと身体を震わせると片膝を地面に付いて顔を下げた。

「主様の仰せのままに。我が身と命、主様をお守りする盾と喜んでなりましたようぞ！」

まるで、長年待ちに待っていたと言わんばかりの音量で歓喜した声で打ち震えている2人を見て、私は思わずこう思った。

『ああ……この子たちもアルベルト達と同じなのですね』

……と。

そう、騒がしい1日が過ぎていったのだった。